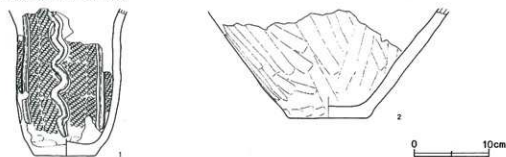


第254図 A区土壇出土土器(6)



第1号土壇出土土器(第255図1~3)

1は蛇行懸垂文が垂下する胴部である。2は磨消し懸垂文間に蛇行懸垂文が垂下する。

第2号土壇出土土器(第255図4~6)

4は平行沈線がめぐる連弧文土器の口縁部、5は磨消し懸垂文の垂下する胴部である。

第3号土壇出土土器(第255図7~11)

7は無文の口縁部、8は横位の隆帯が巡る。

第4号土壇出土土器(第255図12~17)

12は横位の沈線区画に沿って列点が施文される。13は平行沈線の懸垂文が垂下する胴下半部である。

14は頸部に1条の沈線が回り胴部に縦位の条線が施文される。15は磨消し懸垂文の一部であろう。

第8号土壇出土土器(第255図18~23)

18は文様帯下端を区画する横位の隆帯である。19・21・22は磨消し懸垂文の胴部である。20はアルファベット文が描かれる。

第9号土壇出土土器(第255図24~31)

24は口縁直下に列点文が巡る。胴上半部には逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。25はキャリバー類の口縁部であろう。

26は頸部無文帯と胴部の文様帯を区画する横位の隆帯である。27・28は磨消し懸垂文である。

第10号土壇出土土器(第255図32~51)

32・33は文様帯下端を区画する隆帯である。32の地文は縦位の燃糸文である。34は口縁部の文様帯で、楕円区画内部に縦位の集合沈線が充填される。36・37はキャリバー類深鉢の口縁部である。38は逆U字ないし玉抱き状の磨消しモチーフが描かれる。45~48は条

線地文の破片である。51は横位の貫通孔を有する突起で、四つ手の壺型土器であろう。

第11号土壇出土土器(第249図1・第256図1~13)

第249図1はキャリバー類深鉢胴部である。磨消し懸垂文が垂下する。

第256図1は両耳壺の口縁部である。2・3は深鉢の頸部である。2は口縁部文様帯の下端を2本の隆帯で区画し、頸部無文帯が存在する。4は楕円形の沈線区画内部に棒状工具の列点が充填される。

第12号土壇出土土器(第256図14~21)

14はキャリバー類深鉢口縁部である。15は胴部中段で、交互刺突を伴う三本沈線の区画線である。16は蛇行懸垂文である。

18は両耳壺胴上半部の文様帯であろう。20は広口壺ないし両耳壺の胴上半部である。胴部には逆U字の磨消しモチーフが描かれる。

第14号土壇出土土器(第256図22~29)

22は無文の浅鉢口縁部である。23は二本隆帯の懸垂文、24は一本隆帯の蛇行懸垂文である。25は櫛歯状工具の条線、26は半裁竹管状工具による条線である。27は円形刺突を伴う隆帯が垂下する。

第16号土壇出土土器(第256図30~55・第257図1~13)

第256図30はキャリバー類深鉢の口縁部である。口縁直下に1条の隆帯が巡る。

31はキャリバー類深鉢の口縁部で、波状口縁の波頂部の突起である。32・33・35・36は逆U字モチーフの描かれる口縁部である。37は口縁部文様帯下端を区画する隆帯が見られる。胴部は磨消し懸垂文が垂下し、

間隙にわらび手状の沈線が垂下する。

40以下第257図1までは磨消し懸垂文の胴部である。54はH字のモチーフを構成する。55はY字状の懸垂文である。

第257図2～4はハの字状の列点文を地文とする曾利系の土器である。2は断面三角形の隆帯による横楕円形の区画内部に横方向のハの字列点線が描かれる。3は口縁部文様帯を有するキャリバー類の深鉢である。

5は凹線のなぞりを伴う微隆起線により渦巻文が描かれる。6は両耳壺の胴上半部の文様帯である。7は両耳壺の肩部である。

#### 第17号土壇出土土器 (第257図14～29)

14は口縁下に1条の隆帯が巡る口縁部である。地文はRL単節縦位回転の縄文で、隆帯上にも横位回転で施文される。15は断面三角形の隆帯である。23はJ字の磨消し文様が描かれる胴上半部である。

#### 第18号土壇出土土器 (第257図30～39)

30はキャリバー類深鉢口縁部である。31は口縁下に楕円形の磨消しモチーフを描くものである。35は両耳壺の頸部である。38は両耳壺胴上半部である。断面三角形の隆帯で文様が描かれる。橋梁状把手が剥落した痕跡が認められる。

#### 第19号土壇出土土器 (第249図2・第258図・第259図1～20)

第249図2は深鉢である。口縁から胴部中段にかけて残存する。口端上に焼成以前に受けた押圧による変形が観察される。口縁下に1条の沈線が巡る。地文は胴上半部にはRL単節の縄文が施文され、胴下半部には櫛歯状工具の条線が施文される。

第258図1～3はキャリバー類深鉢の口縁部である。1は隆帯渦巻き文の一部である。4は口縁部文様帯下端の区画線である。

5は口縁下に1条の隆帯が巡り、胴上半部に逆U字の磨消しモチーフが描かれる。6～9は微隆起線ないし断面三角形の隆帯で文様が描かれる口縁部である。8は二本隆帯で縦長の玉抱きモチーフが描かれる。9は逆U字の磨消しモチーフの間に生じた逆三角形の

地文部に円文が配される。

10はなぞりを加えた断面三角形の隆帯で渦巻き文やパネル状の区画が描かれる。11は二本隆帯の懸垂文、12はY字状の懸垂文が描かれる。

13・14は口縁下に1条の微隆起線が巡り、胴部には縄文のみ施文される。15・16は口縁下にわらび手状の沈線によって横楕円形の無文部を形成する。

第259図1は口端直下から縄文が施文され、口縁下に1条の沈線が巡る。2は口縁下に1条の沈線が巡り、これに沿って円形の列点線が巡る。

4は逆U字、5は波状の磨消しモチーフが描かれる口縁部である。7はJ字文、8はJ字ないし玉抱きの磨消しモチーフが描かれる。9は鋸歯状の磨消しモチーフが交差する。10はアルファベット文である。

11は磨消し懸垂文間に兩垂れ状の列点文を持つ胴部である。12は両耳壺胴上半部である。13は幅広い橋梁状把手である。

15は後期前葉畑之内式で、胴上半部に同心円状の沈線文が描かれる。

16～20は底部の破片である。19は高台付きの底部、20は台付き深鉢の脚台部である。

#### 第21号土壇出土土器 (第259図21・22)

21・22とも無文の胴下半部である。

#### 第23号土壇出土土器 (第259図23～31)

23は無文の口縁部で口端内屈し、胴部には縄文が施文される。24は横位の平行沈線で器面を区画する。25は頸部無文帯、26は二本隆帯の懸垂文である。

30は逆U字の磨消しモチーフである。

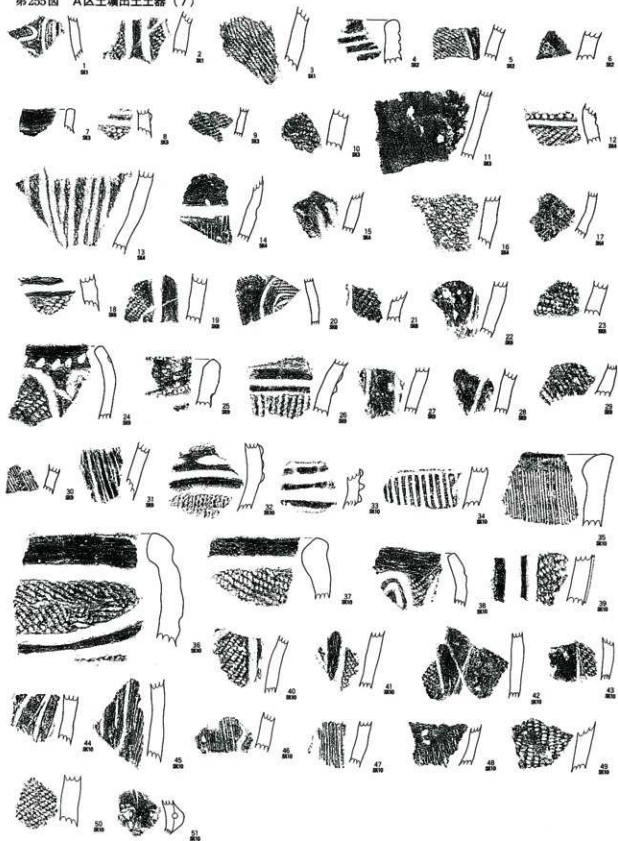
#### 第24号土壇出土土器 (第260図1～10)

1は連続状の隆帯が垂下する胴部である。2は口縁下に1条の沈線が巡り、胴部にはRL単節の縄文が施文される。3はキャリバー類深鉢の口縁部である。8は称名寺式であろう。

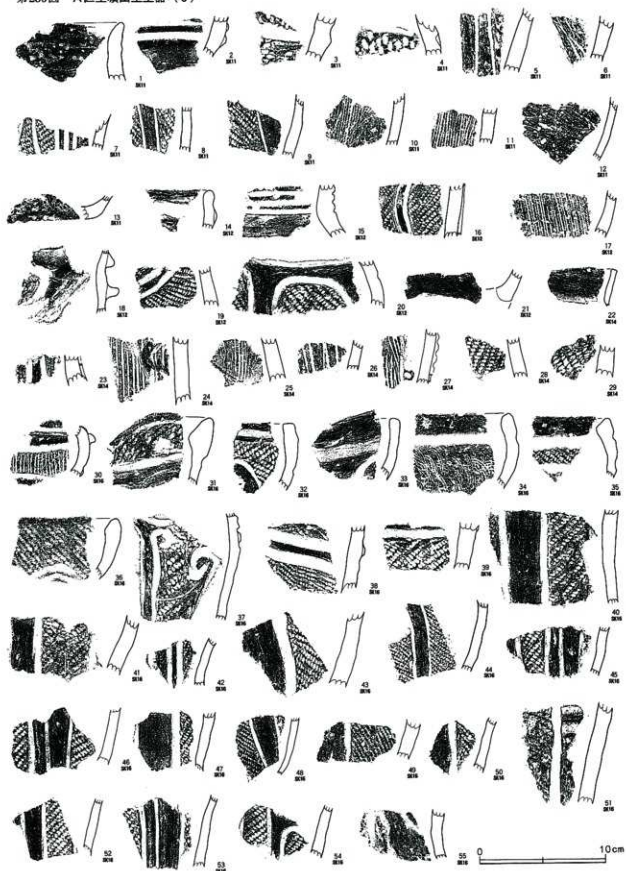
#### 第26号土壇出土土器 (第260図11～20)

11は逆U字の磨消しモチーフが描かれる。13は微隆起線による渦巻モチーフの一部であろう。16・17は連弧文系の土器である。

第255图 A区土坑出土土器(7)



第256图 A区土坑出土土器(8)



第32号土壙出土土器 (第260図21~27)

21・22・24・25はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。23は刻みを伴う隆帯で楕円形の区画が描かれる。26は無文の浅鉢口縁部である。

第33号土壙出土土器 (第249図3・第260図28~38)

第249図3は深鉢である。口縁下に指頭瓦痕が巡り、胴部に幅広の一段懸垂文が垂下する。胴部上半部と下半部では使用される縄文原体の太さが異なっている。

第260図28はキャリバー類の口縁部である。29は無文の口縁部で口唇肥厚し、波状口縁の波頂部から1条の隆帯が垂下する。30も無文の口縁で、波状口縁の波頂部が前方へ山形に突出する。

31は陰刻風の交互刺突文の巡る口縁部である。32・33は連弧文土器の胴部である。34はキャリバー類深鉢の頸部である。

第34号土壙出土土器 (第260図39~54)

39は前期の土器片で、口縁直下に2段の爪形文が巡る。40は勝坂系の深鉢頸部である。41は無文浅鉢の口縁部である。42・43も浅鉢口縁部であろう。44~47はキャリバー類浅鉢の頸部である。48はS字状の浮線文がみられる。

第35号土壙出土土器 (第260図55)

平行沈線の懸垂文が垂下する胴部である。

第36号土壙出土土器 (第260図56~59)

56はキャリバー類深鉢口縁部である。57は連弧文系の深鉢胴部である。58は磨消し連弧文、59は懸垂文間に波状の条線が描かれる。

第39号土壙出土土器 (第261図1~13)

5・6はキャリバー類深鉢の口縁部である。1は口縁部文様帯の下端を区画する隆帯である。3は両耳垂の頸部であろう。4は深鉢胴部で半截竹管状工具の平行沈線が重畳して頸部と胴部の境を区画する。

7は口縁直下に1条の沈線が巡る。8は無文の口縁部である。

第40号土壙出土土器 (第261図14~21)

14はキャリバー類の口縁で、頸部無文帯が存在する。15は地文燃来文で剣先文がみられる。

第41号土壙出土土器 (第261図22・23)

22は両側に沈線のなぞりを伴う断面三角形の隆帯が垂下する。23は縄文のみの胴部である。

第42号土壙出土土器 (第249図4・第261図24~26)

第249図4は吉井城山頰の口縁から胴上半部である。波状の沈線区画に逆U字状の区画が結合してY字状の磨消し懸垂文を構成する。モチーフの間隙にはわらび手状の沈線が描かれる。第261図24はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯であろう。25は磨消し懸垂文の胴部である。

第43号土壙出土土器 (第261図27)

キャリバー類深鉢の胴上半部である。頸部との間を二本隆帯で区画し、胴部に蛇行懸垂文が垂下する。

第45号土壙出土土器 (第261図28)

縄文のみ施文される胴部である。

第46号土壙出土土器 (第249図5~7・第261図29~48)

第249図5は後期初頭における加曾利E系の深鉢である。口縁は内屈して外面に稜を形成し、四方に舌状の突起を付す。胴部は鋸歯状の磨消しモチーフが上下に対向して描かれる。

6は粗製の深鉢である。水平口縁で、器形は頸部で外反し、口縁が直線的に開く。

7は深鉢胴下半部から底部である。L無節の縄文が横位回転で施文される。

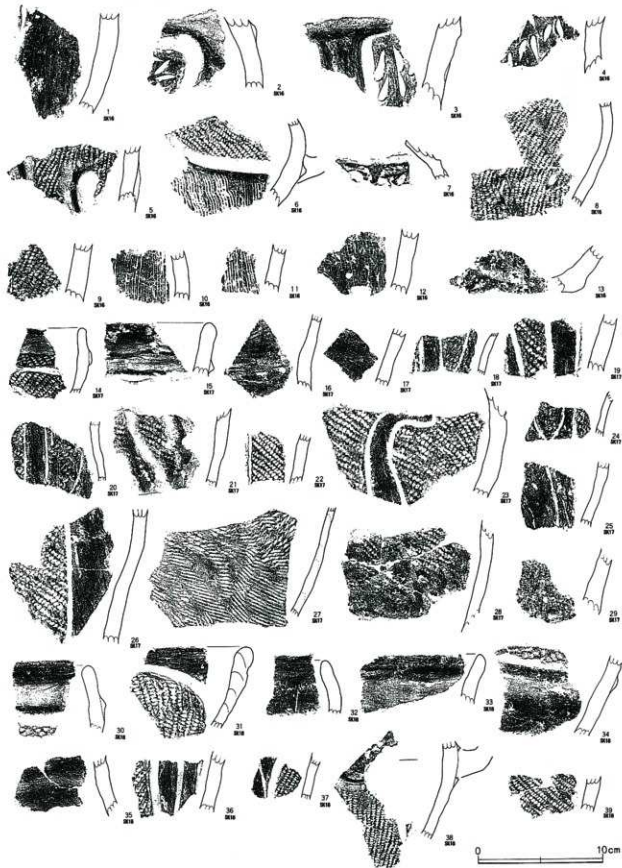
第261図29は半截竹管状工具の平行沈線によって懸垂文や蛇行懸垂文が描かれる。30は吉井城山頰の口縁部で、篋状工具先端による刺突列が巡り、波状の沈線区画内部にわらび手状の沈線が描かれる。31はキャリバー類の口縁部で、口端上に突起が付される。32は微隆起線+沈線による文様が切り合うもので、関沢類の胴部であろう。33はこれと同一個体と思われる。

34~36は磨消し懸垂文の胴部である。37は幅の狭い磨消しモチーフが描かれる胴部で、称名寺式であろう。38は地文条線の磨消し懸垂文である。

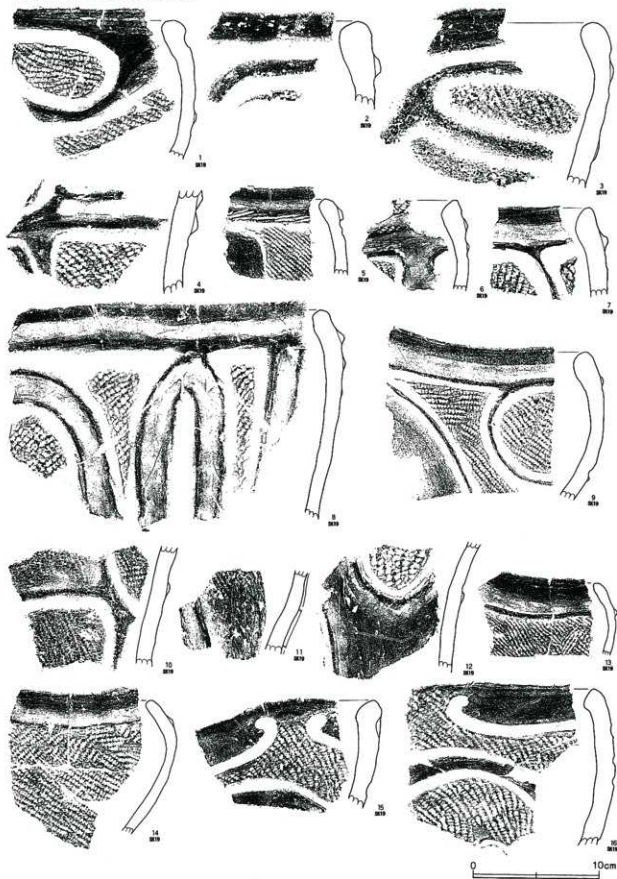
第48号土壙出土土器 (第262図1~5)

1はキャリバー類深鉢の胴部で、二本隆帯の懸垂文

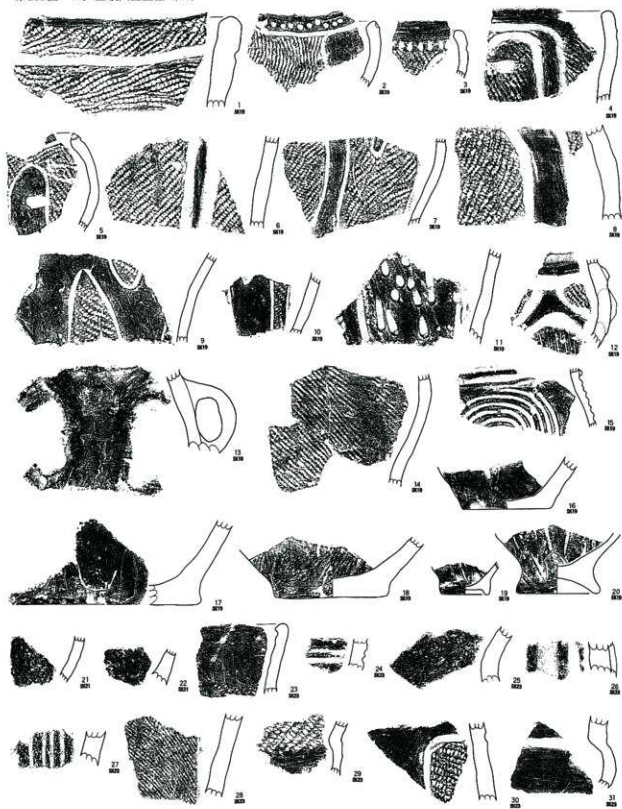
第257图 A区土壤出土土器(9)



第258图 A区土坑出土土器(10)



第259图 A区土坑出土土器(11)



0 10cm



と一本隆帯の蛇行懸垂文が交互に配される。2は二本隆帯の曲線モチーフで、唐草文の一部であろう。3は磨消し懸垂文の胴部である。4は縄文のみの破片、5は口縁部でL R横位回転の繊細な縄文が施文され、頸部に特に区画を設けず無文部が介在する。

#### 第49号土壙出土土器 (第262図6)

無文の浅鉢胴下半部である。

#### 第50号土壙出土土器 (第262図7~11)

7は口縁下に1条の沈線が巡り、平行沈線による鋸歯状の磨消しモチーフが描かれる。8は磨消し懸垂文、9はアルファベット文で、L R単節の縄文が充填施文される。

11は胴上半部に文様帯を持つ浅鉢で、胴部中段の屈曲部分に巡る隆帯である。隆帯上には矢羽根状の刻みが施される。

#### 第51号土壙出土土器 (第262図12)

キャリバー類深鉢の口縁部である。隆帯による繫弧モチーフの接点で、小渦巻モチーフが描かれる。

#### 第56号土壙出土土器 (第262図13・14)

13は無文の口縁部、14はL R単節の縄文のみ施文される胴部である。

#### 第57号土壙出土土器 (第262図15)

斜位の刻みを伴う隆帯が巡る。地文はR L単節の縄文である。

#### 第60号土壙出土土器 (第262図16)

無文の口縁部である。口端は平坦である。両耳壺に伴うものか。

#### 第62号土壙出土土器 (第262図17~26)

17・18は同一個体と思われる。半裁竹管状工具による波状の平行沈線が巡る。地文はR L単節の縄文である。19・21は半裁竹管状工具の平行沈線によって器面を横位に区画し、ここから同一工具による懸垂文が垂下する。

22は波状の浮線文が巡る深鉢頸部である。23は口縁部文様帯下端から平行沈線の懸垂文が垂下する。

#### 第63号土壙出土土器 (第262図27)

三本沈線の磨消し懸垂文が垂下する胴部である。

#### 第64号土壙出土土器 (第262図28~32)

28・29はキャリバー類深鉢の口縁部である。28は口端直下に1条の隆帯が巡る。29は渦巻き状の沈線を描く大型の突起が配される。30・31は頸部に括れを持ち、この部分に波状の浮線文が巡る。胴部には半裁竹管状工具による波状モチーフが描かれる。

#### 第65号土壙出土土器 (第262図33~35)

33はキャリバー類深鉢の口縁部である。34は棒状工具の沈線により重弧文が描かれる。

#### 第66号土壙出土土器 (第250図1・第262図36~42)

第250図1は磨消し連弧文の小型深鉢である。口縁と胴部中段に刺突列を伴う1条の沈線が巡る。胴上半部には平行沈線による大波状の区画が巡り、区画から上にR L単節の縄文が充填施文される。

第262図36はキャリバー類の口縁部文様帯である。37は隆帯による蛇行懸垂文が垂下する胴部である。38は山形波状口縁の波頂部に渦巻き文が描かれる。

#### 第67号土壙出土土器 (第262図43~45)

43は磨消し懸垂文が垂下する胴部である。

#### 第68号土壙出土土器 (第263図1~5)

1~3は磨消し懸垂文の胴部である。4は鋸歯状の磨消しモチーフが対向する胴部中段である。

#### 第69号土壙出土土器 (第263図6~20)

6は逆U字モチーフが描かれる口縁部である。7・8はこれと同一個体と思われる胴上半部である。20は懸垂文間に櫛歯状工具の条線が施文される。

#### 第77 A号土壙出土土器 (第263図21~25)

21は矢羽根状の刻みを伴う隆帯により文様が描かれる。22は口縁下に1条の沈線が巡る。

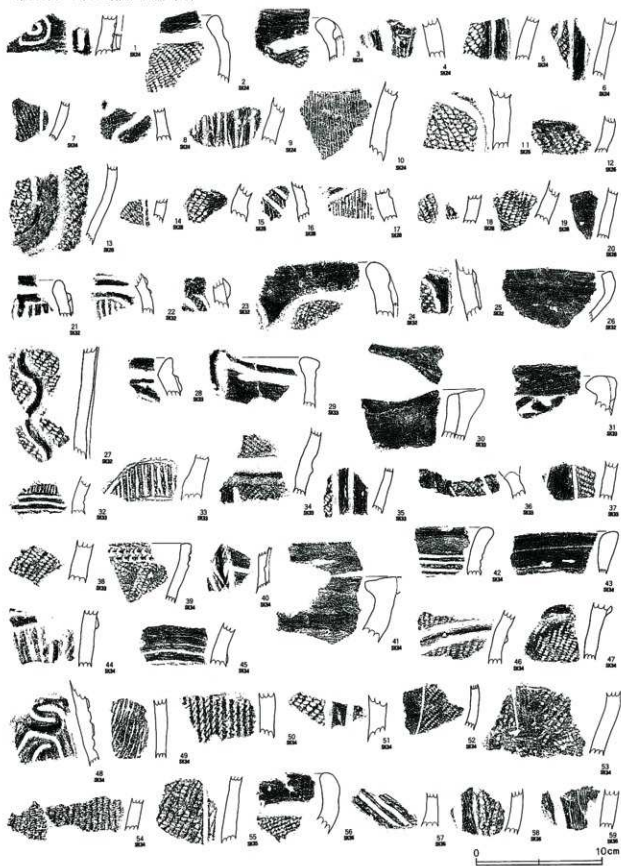
#### 第78号土壙出土土器 (第263図26~80)

26は波状口縁で、玉抱き状の磨消しモチーフが描かれる。地文はR L単節の縄文である。27はキャリバー類深鉢で、波状口縁の波頂部に付される突起である。

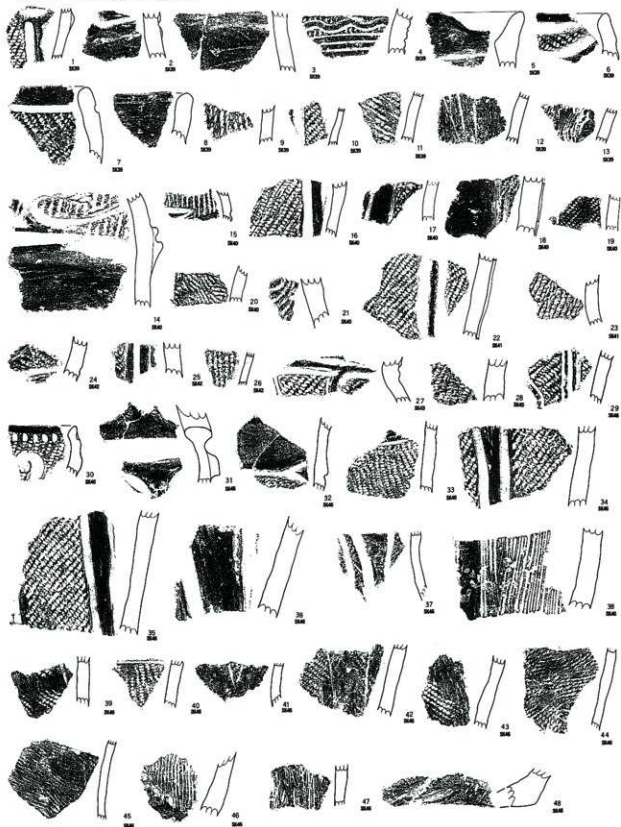
#### 第79号土壙出土土器 (第263図31~39、第264図1~6)

第263図31はキャリバー類の深鉢である。頸部に1条の隆帯が巡る。口縁部には二本隆帯の曲線モチーフ

第260图 A区土坑出土土器(12)



第261图 A区土坑出土土器(13)



0 10cm

第262图 A区土壤出土土器(14)



が展開する。地文は口縁部が横位、胴部が縦位回転の燃糸文である。頸部無文帯は存在しない。32は頸部無文帯と胴部の間を1条の隆帯で区画する。胴部には蛇行懸垂文が垂下する。33は連弧文土器の口縁部で、三本沈線の区画が巡る。34は波状口縁で、口縁下に1条の隆帯が巡る。胴部には櫛歯状工具の条線が縦位に施文される。35は水平口縁で口縁下に1条の沈線が巡る。39は半裁竹管状工具の蛇行懸垂文である。40は磨消し連弧文のH字モチーフである。

第264図1は縦位の燃糸文、79は縄文のみ施文される破片である。

#### 第80号土壇出土土器 (第264図7～18)

7は斜位の刻みを伴う隆帯区画が巡る胴部である。8は浅鉢胴上半部の文様帯である。半裁竹管状工具の平行沈線で横楕円形のモチーフが描かれ、外部には放射状の短沈線、内部には矢羽根状の短沈線が充填される。9・10はキャリバー類深鉢の頸部である。11は半裁竹管状工具の結節沈線文が垂下する。12は縦長の突起が付される頸部である。13は平行沈線により逆Y字状モチーフが描かれる。

#### 第84号土壇出土土器 (第264図19)

薄手の器壁に太く深い沈線により渦巻き文が描かれるもので、称名寺式であろう。

#### 第85号土壇出土土器 (第264図20～24)

20は蝸牛状の突起である。21はキャリバー類深鉢の口縁部である。22は口縁下に断面三角形の隆帯で文様が描かれる。

#### 第86号土壇出土土器 (第264図25～28)

25の深鉢口縁部は棒状工具先端による斜位の刺突列が巡る。胴部には逆U字の磨消しモチーフが描かれる。26は二本隆帯の懸垂文が垂下する。27は微隆起線の磨消しモチーフである。

#### 第88号土壇出土土器 (第264図29～36)

29は刻みを伴う隆帯が巡る胴部である。30は交互刺突文を伴う平行沈線が巡る口縁部である。33・34は連弧文系の胴部である。

#### 第89号土壇出土土器 (第250図2・第264図37～40)

第250図2は浅鉢胴下半部である。半裁竹管状工具による波状の集合沈線が垂下する。

第264図37は半裁竹管状工具の平行沈線で器面を縦横に分割する。

#### 第90号土壇出土土器 (第264図41～43)

41は連弧文土器の口縁部である。42はキャリバー類の口縁部文様帯である。43は連弧文の胴上半部である。

#### 第91号土壇出土土器 (第264図44・45)

44は逆U字状の沈線モチーフである。

#### 第95号土壇出土土器 (第264図46・47・第265図1～4)

第264図46は連弧文土器の口縁部である。47は地文縄文上に横位の平行沈線が巡る。

第265図1は縄文のみの破片である。2は地文条線で、縦位の平行沈線が垂下する。

#### 第97号土壇出土土器 (第250図3・第265図5～19)

第250図3は連弧文土器である。波状口縁で口縁下に交互刺突を伴う平行沈線が巡る。胴上半部には三本沈線の連弧文が描かれ、胴中段の区画線との間を対弧状の沈線で連結する。第265図5～7はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。6は波状口縁で、波頂部から隆帯+沈線のわらび手状モチーフが垂下する。8は口縁下に1条の沈線が巡り、その下に円形の刺突列が巡る。9は頸部無文帯がみられる。11・12は連弧文が描かれる。19は唐草文系深鉢の頸部で篋目文が施文される。

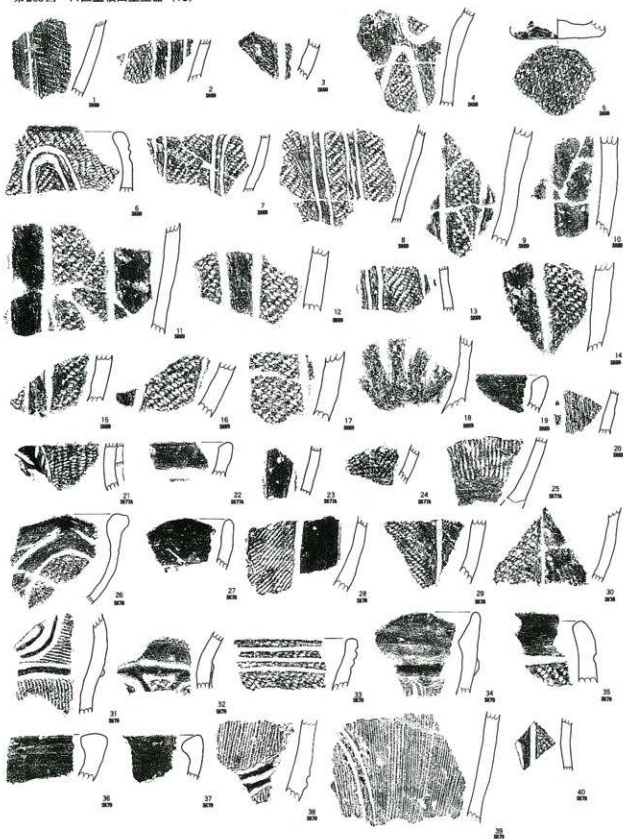
#### 第98号土壇出土土器 (第251図1・第265図20～36・第266図1～7)

第251図1はキャリバー類深鉢口縁部から頸部である。小波状口縁で、二本隆帯の直線的な入り組みもモチーフが描かれ、頸部には無文帯が存在する。

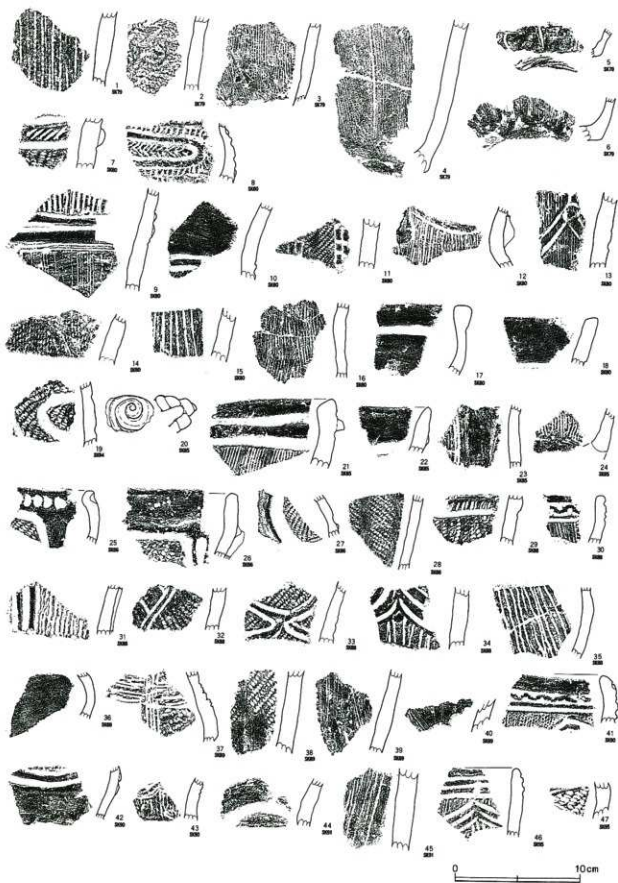
第265図20～23はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。25は頸部無文帯であろう。25～33は隆帯懸垂文の胴部である。34～36は半裁竹管状工具などの平行沈線による懸垂文である。

第266図1～3は無文の口縁部である。4は無文胴

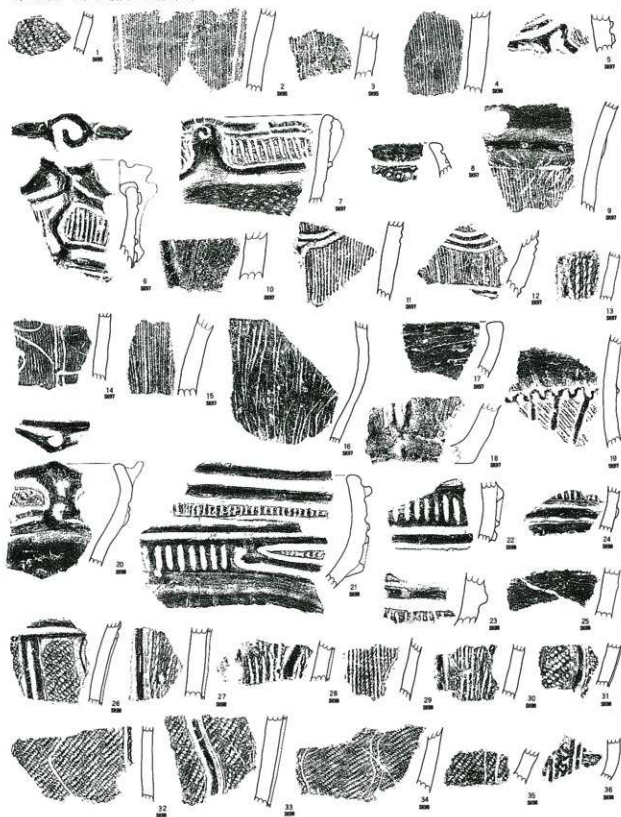
第263图 A区土坑出土土器(15)



第264图 A区土坑出土土器 (16)



第265图 A区土墙出土土器(17)



0 10cm



張りの浅鉢である。

**第99号土壇出土土器** (第266図8～10)

8は捺糸文のみの胴部である。9は磨消し懸垂文が施文される。10は逆U字の沈線が描かれる。

**第100号土壇出土土器** (第251図3～5・第266図11・12)

第251図3はキャリバー類深鉢口縁部である。胴下半部を欠失する。水平口縁で、口縁部に入り組み状の渦巻きモチーフが横位に展開し、胴部に磨消し懸垂文が垂下する。懸垂文間にはRL縦位回転の縄文が施文され、単沈線の蛇行懸垂文が垂下する。4はキャリバー類深鉢口縁部である。胴下半部を欠失する。3に類似するが波状口縁である。

5は両耳壺である。口縁から胴部中段にかけて残存する。口縁無文で、胴部には逆U字の磨消しモチーフが描かれる。肩部に橋梁状の把手が付され、背面にわらび手状の凹線が描かれる。

**第101号土壇出土土器** (第252図1・第266図13～35)

第252図1は深鉢胴部中段である。頸部との境に1条の沈線が巡り、三本沈線の懸垂文と平行沈線の蛇行懸垂文が交互に垂下する。

第266図13は縦位の沈線で器面を分割し、沈線による同心円文が描かれる。

14～19はキャリバー類の口縁部文様帯である。20・21は頸部無文帯である。22～26は蛇行懸垂文である。27は半裁竹管状工具の平行沈線により懸垂文が描かれる。28・29は唐草文の胴下半部である。

**第102号土壇出土土器** (第252図2～4・第266図36～40・第267図1～3)

第252図2はキャリバー類深鉢の口縁部である。口縁部文様帯下端の区画に小渦巻きの突起が付され、いわゆる三原田式に類似する構成を持っている。

3・4は胴上半部に文様帯を持つ浅鉢である。

第266図36はキャリバー類深鉢であるが、口縁部の文様モチーフは省略され、LR単節の縄文だけが施文される。第267図1～5は浅鉢である。

**第104号土壇出土土器** (第267図6～25)

6～8は勝坂系の土器である。9～12はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。13は頸部と胴部の境を区画する隆帯がみられ、胴部には二本隆帯の懸垂文が垂下する。14～17は隆帯懸垂文の胴部である。17は横位の平行沈線で器面が分帯され、平行沈線が垂下する。18は平行沈線の弧状モチーフが上下に対向する。19は平行沈線による蛇行懸垂文である。

**第112号土壇出土土器** (第267図28)

唐草文系の深鉢である。交互刺突を伴う隆帯が巡る。

**第113号土壇出土土器** (第267図29・30)

29は無文胴張りの浅鉢である。30は縦位の条線だけが施文される。

**第114号土壇出土土器** (第267図31～33)

31は無文の口縁部である。32・33は縦位の条線だけが施文される。

**第115号土壇出土土器** (第267図34)

隆帯による蛇行懸垂文が垂下する。

**第118号土壇出土土器** (第267図35～39)

35は蛇行懸垂文が垂下する胴上半部である。

**第120号土壇出土土器** (第268図1～4)

1は渦巻き文が描かれる胴部である。2は平行沈線により器面が縦横に分割される。3は連弧文である。第121号土壇出土土器 (第252図5～7・第268図5～21)

第252図5はキャリバー類に類似の深鉢である。器形は胴下半部から口縁にかけて直線的に開く。口縁下に隆帯による横楕円形の区画を構成する。

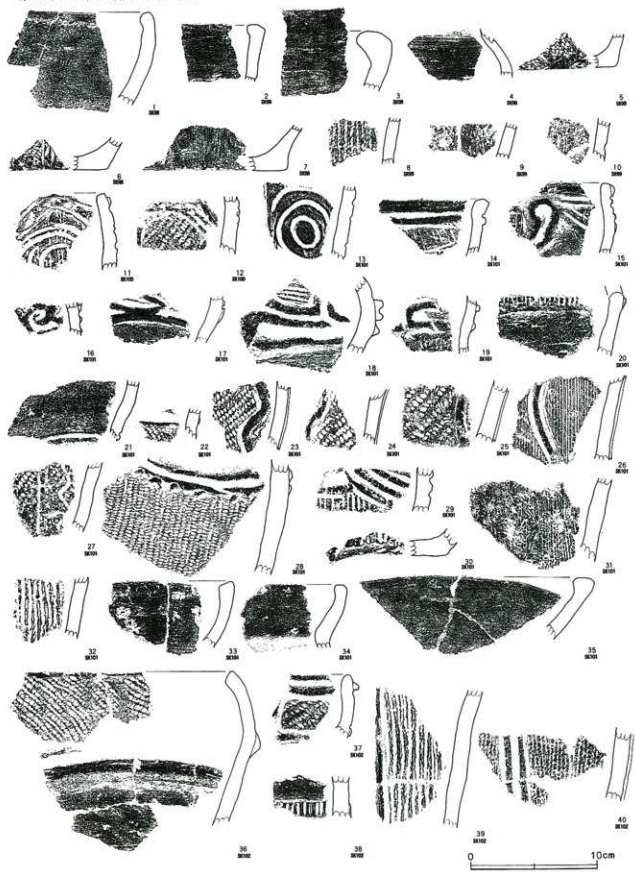
6はキャリバー類深鉢と思われる。平行沈線の懸垂文を対弧状の沈線で繋ぐH字モチーフが描かれる。

7は磨消し連弧文である。口縁直下と胴部中段に円形の刺突列が巡る。胴上半部には平行沈線による波状の磨消しモチーフが描かれる。胴部中段には平行沈線+刺突列の区画が描かれる。

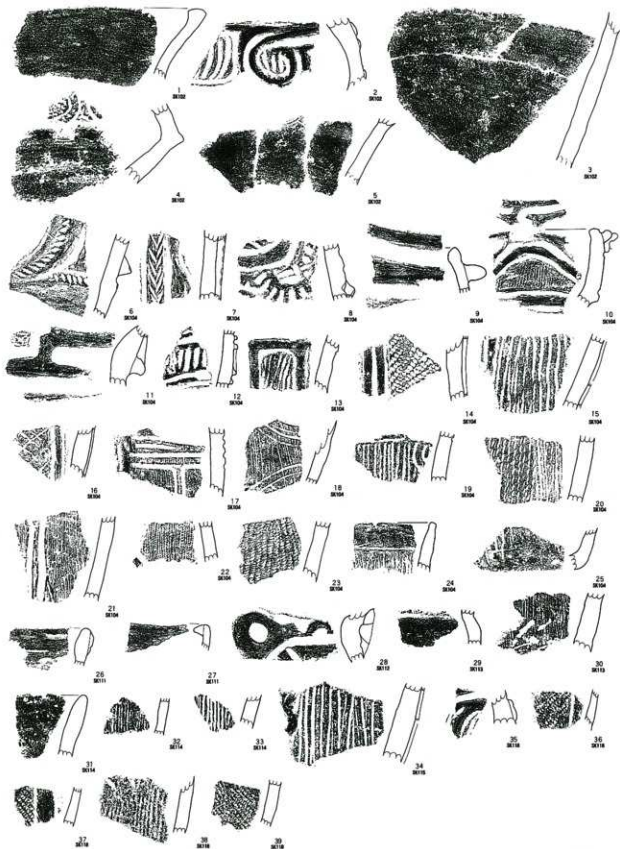
第268図5～10はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。11は頸部無文帯である。

12・13は曾利系の口縁部で重弧文が描かれる。14は

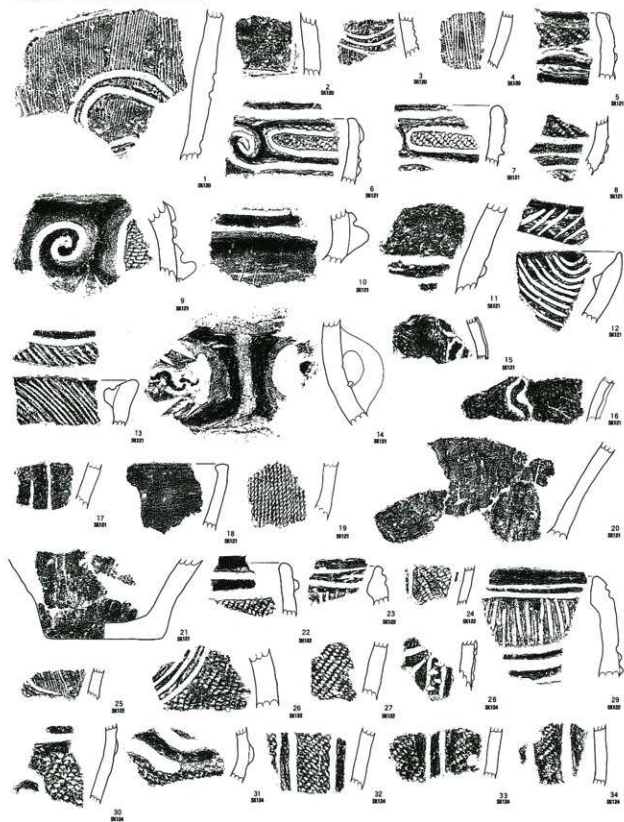
第266图 A区土坑出土土器(18)



第267图 A区土坑出土土器(19)



第268图 A区土壤出土土器(20)



橋梁状の把手が付される唐草文系の深鉢胴部中段である。

**第122号土壙出土土器** (第268図22～27・29)

22・29はキャリバー類深鉢の口縁部である。23は連弧文系の口縁部である。25・26は連弧文が描かれる胴部である。

**第124号土壙出土土器** (第268図28・30～34・第269図1～3)

第268図28は交互刺突を伴う隆帯で器面を縦位に分割する。30・33はキャリバー類の口縁部文様帯である。第269図1は口縁部文様帯下端の隆帯である。

**第125号土壙出土土器** (第269図4～7)

5は矢羽根状の沈線を地文とする。

**第127号土壙出土土器** (第269図8)

地文条線上に隆帯による蛇行懸垂文が垂下する。

**第128号土壙出土土器** (第253図1・第269図9～20)

第253図1は無文の浅鉢である。

第269図9は勝坂系の深鉢である。10・11は縦位の条線が施文される口縁部である。12・13は二本隆帯の懸垂文、14は二本隆帯で曲線モチーフを描く。15・16は連弧文の胴部である。17は重弧文が描かれる。21は深鉢胴部中段で、交互刺突を伴う平行沈線が2段に巡る。

**第129号土壙出土土器** (第253図2・第269図22～31)

第253図2は両耳壺である。平行沈線による波状の区画文が描かれ、間隙に楕円やわらび手の沈線文が描き込まれる。

第269図22は勝坂系の深鉢口縁部である。23は二本隆帯の懸垂文が垂下する。26は連弧文系の深鉢で、胴部中段に平行沈線が巡る。27は横位の平行沈線上に一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。

**第130号土壙出土土器** (第269図32)

深鉢である。頸部と胴部の境を1条の隆帯で区画し、胴部に二本隆帯の懸垂文が垂下する。

**第131号土壙出土土器** (第270図1～9)

1は曾利系深鉢の口縁部である。一本隆帯の繫弧状モチーフが巡り、二本隆帯の懸垂文が垂下する。2は連弧文系の口縁部である。口縁下にわらび手状のモチーフを描く平行沈線が巡る。

**第132号土壙出土土器** (第270図10・11)

10は貫通孔を有する口縁部で、平行沈線による横S字モチーフが描かれる。

**第137号土壙出土土器** (第270図12～19)

12はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。13・14は一本隆帯の蛇行懸垂文である。15は横位の平行沈線間に刺突列が施される。16は三本沈線の渦巻きモチーフである。18は有孔鑄付き土器である。

**第138号土壙出土土器** (第270図20～34)

20は連弧文土器である。21はキャリバー類深鉢であろう。25～28は連弧文系の土器である。29は隆帯による蛇行懸垂文の両側に集合沈線が描かれる。

**第139号土壙出土土器** (第270図35～47)

35・36は浅鉢の口縁部であろう。37は深鉢頸部無文帯である。38は二本隆帯の渦巻き文から蛇行懸垂文が垂下する。41は三本沈線で渦巻き文が描かれる。42は籠目文の頸部である。43・44は連弧文系の土器である。45は刻みを有する隆帯が垂下する。

**第140号土壙出土土器** (第270図48～52・第271図1～3)

第270図48はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。49は連弧文土器の口縁部である。第271図1は有孔鑄付き土器である。

**第142号土壙出土土器** (第271図4～10)

4・5はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。6は胴部に二本隆帯の懸垂文が垂下する。7は磨消し連弧文である。

**第144号土壙出土土器** (第253図3・第271図11～19)

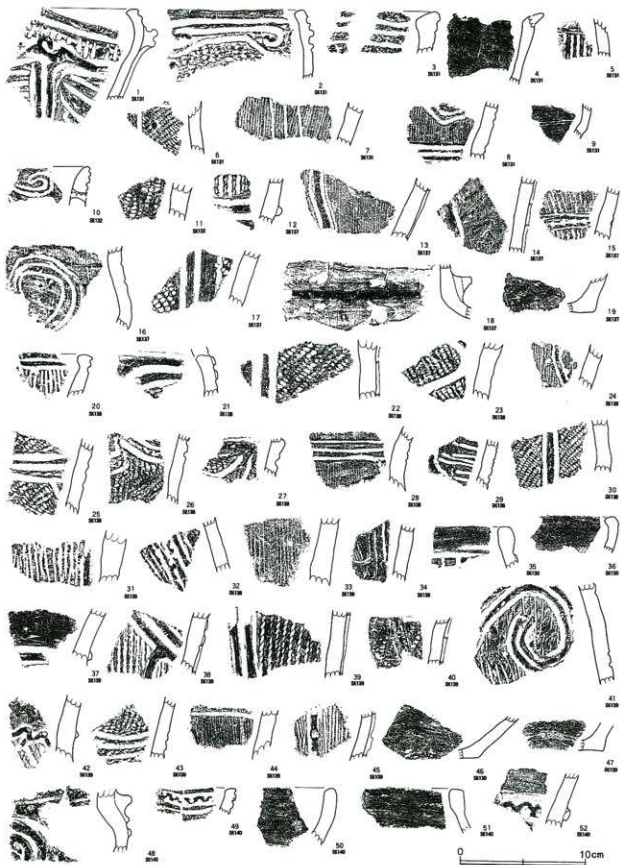
第253図3は深鉢の胴下半部である。底部直上できびれを持ち、直線的に開く。

第271図11～13はキャリバー類深鉢の口縁部である。

第269图 A区土壤出土土器(21)



第270图 A区土坑出土土器 (22)



第271图 A区土壤出土土器(23)





14は隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。15は三本沈線による磨消しモチーフが展開する胴部である。16は両耳壺胴上半部の文様帯であろう。

**第145号土壇出土土器**（第253図4・第271図20）

第253図4は磨消し懸垂文が垂下する。第271図20は無文の口縁部である。

**第147号土壇出土土器**（第271図21～23）

21は隆帯懸垂文、22は沈線の懸垂文である。

**第148号土壇出土土器**（第271図24～29）

24・25はキャリバー類の口縁部文様帯である。26は口端直下に1条の凹線が巡る。27・28は磨消し懸垂文である。

**第151号土壇出土土器**（第271図30～35）

30は頸部と胴部との境を交互刺突を伴う隆帯で区画する。32～34は連弧文系の土器である。

**第152号土壇出土土器**（第271図36～43・第272図1～9）

36は横位の条線上に半裁竹管の刺突を伴う隆帯が垂下する。37・38はキャリバー類の口縁部文様帯である。40・41は隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。42は交互刺突を伴う平行沈線が巡る。第272図1は三本沈線の懸垂文、2は磨消し懸垂文である。

**第153号土壇出土土器**（第253図5・第272図10～16）

第253図5はキャリバー類深鉢で、2つの部分に別れて出土した。口縁から胴上半部はR L R複節の縄文、胴下半部はR L単節の縄文が施文される。

第272図10～12は文様帯下端を区画する隆帯である。11は隆帯に沿って縦位の短沈線が巡る。

**第154号土壇出土土器**（第272図17～19）

17はキャリバー類の口縁部である。18は玉抱き状の磨消しモチーフが描かれる。

**第155号土壇出土土器**（第272図20～23）

20は口縁部文様帯下端の隆帯である。22は半裁竹管状工具の平行沈線で懸垂文と蛇行懸垂文が描かれる。

**第157号土壇出土土器**（第272図24～27）

24は口縁直下に刻みを伴う1条の隆帯が巡る。25は

口縁部文様帯下端を区画する隆帯である。

**第158号土壇出土土器**（第272図28～32）

28・29は口縁部文様帯である。30は三本沈線の懸垂文が垂下する。31は1条の凹線が巡る。

**第159号土壇出土土器**（第272図33）

胴上半部の文様帯を持つ浅鉢の胴部中段である。

**第163号土壇出土土器**（第272図34・35・第273図1～10）

第272図34・35・第273図1はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。3～5は隆帯の蛇行懸垂文である。6は交互刺突を伴う隆帯が巡る頸部である。

**第166号土壇出土土器**（第273図11～20）

11は交互刺突を伴う平行沈線が垂下する深鉢口縁から頸部である。12は勝坂系の土器である。13は角押文が施文される。14はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。15・16は胴部中段を横位の平行沈線で区画するものである。19は逆U字の磨消し文様である。

**第167号土壇出土土器**（第273図21～27）

21は交互刺突文である。22は半裁竹管状工具内面のなぞりを伴う隆帯で曲線モチーフが描かれる。

**第168号土壇出土土器**（第273図28～32）

28・29はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯下端を区画する隆帯である。31は胴上半部の文様帯を持つ浅鉢である。

**第173号土壇出土土器**（第274図1～3）

1は刻みを伴う断面三角形の隆帯である。2は隆帯懸垂文の両側に縦線状の沈線が描かれる。

**第174号土壇出土土器**（第274図4～7）

4は交互刺突を伴う隆帯が巡る深鉢頸部である。

**第177号土壇出土土器**（第274図8～10）

8は逆U字状の磨消し文様が描かれる口縁部である。

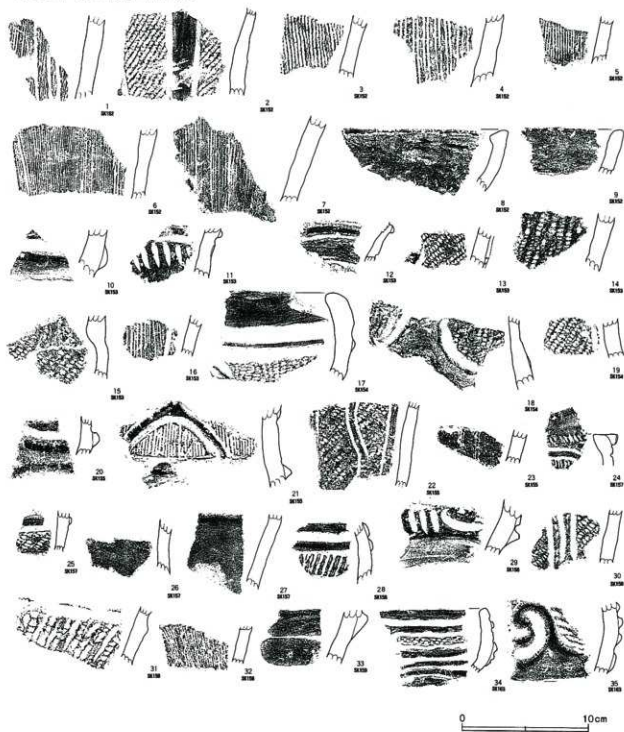
**第178号土壇出土土器**（第274図11）

縦位の燃糸文だけが施文される胴部である。

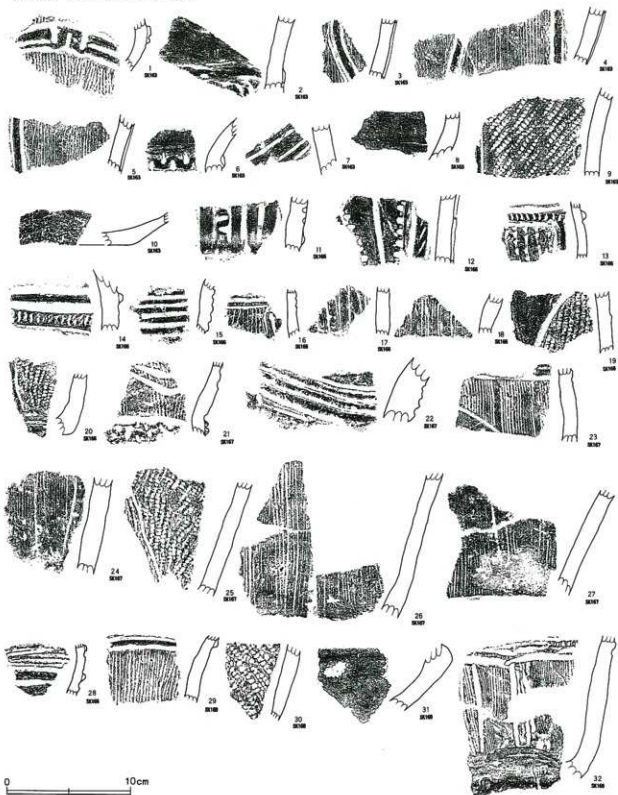
**第179号土壇出土土器**（第274図12・13）

12は胴部中段に縦位の刻みを伴う隆帯が巡り、下半部に逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。13は口縁

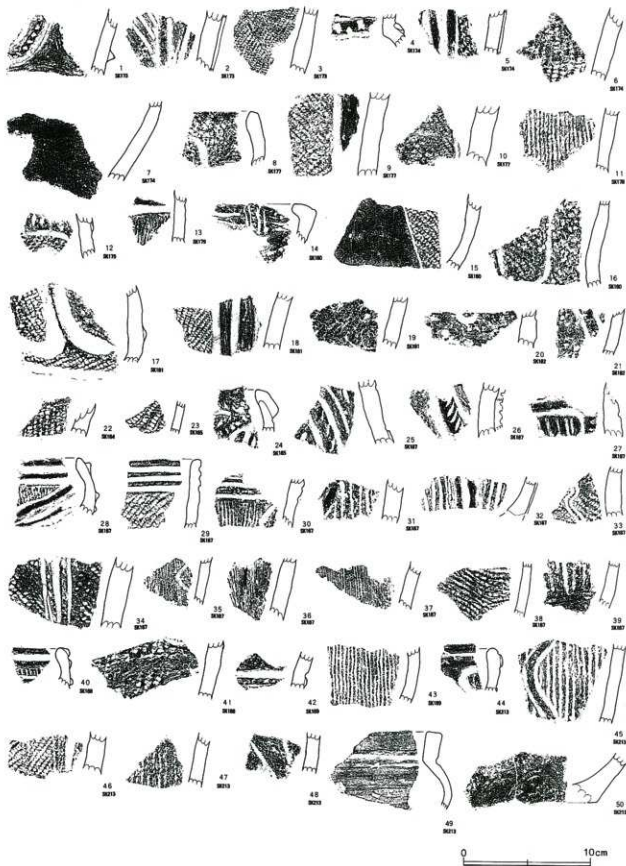
第272图 A区土坑出土土器(24)



第273图 A区土坑出土土器(25)



第274图 A区土壤出土土器(26)



部付近の破片である。1条の沈線が巡り、上半部は無文、下半部に縦位の条線が描かれる。

**第180号土壇出土土器** (第254図1・第274図14・16)

第254図1はキャリバー類深鉢胴部から底部である。一本隆帯の懸垂文と蛇行懸垂文が交互に垂下する。

第274図14はくの字に内屈する深鉢口縁である。15は鋸歯状の磨消しモチーフの一部であろう。16はU字状の沈線モチーフである。

**第181号土壇出土土器** (第274図17~19)

17は両耳壺胴上半部の文様帯である。断面三角形の隆帯で楕円形の区画文が描かれる。

**第182号土壇出土土器** (第274図20・21)

幅の狭い平行沈線により曲線的なモチーフが描かれる。

**第184号土壇出土土器** (第274図22)

縄文のみ施文される破片である。

**第185号土壇出土土器** (第274図23・24)

23は縄文のみ施文される破片、24は波状口縁で、刻みを伴う隆帯により三角形の区画が形成される。

**第187号土壇出土土器** (第254図2・第274図25~39)

第254図2は無文の浅鉢胴部である。

第274図25~27は勝板系の土器である。刻みを伴う隆帯により区画文が描かれる。28はキャリバー類深鉢の口縁部である。29は連弧文系の深鉢であろう。30は横位の平行沈線から単沈線の蛇行懸垂文が垂下する。

**第188号土壇出土土器** (第274図40・41)

40はキャリバー類深鉢の口縁部である。41は横位のごく浅い凹線がみられる。

**第189号土壇出土土器** (第274図42・43)

キャリバー類の口縁部文様帯下端の隆帯である。

**第213号土壇出土土器** (第274図44~50)

44はキャリバー類深鉢の口縁部である。45は平行沈線の蛇行懸垂文である。

#### (4) 埋堯

発掘調査の時点でA区からは27基の埋堯が検出された。それらのうち、調査の進行に伴って抹消されたもの7基、住居跡内埋堯に編入されたもの11基、都合18基については員数外とした。詳細は対照表を参照のこと。

**A区第1号埋堯** (第275図・第277図)

G-13区に所在する。胴下半部を欠いた深鉢を逆に埋設したものである。掘り方は不整楕円形のビットで、長さ85cm、短径75cm、深さ12cmを測る。主軸方向はN-59.5°-Wを指す。底面は平坦で、土器は口縁部の一端をビット底面に着けた状態で、破断面を東に傾けた状態で埋設されていた。

**出土土器** (第277図1)

胴下半部を欠失する深鉢である。口縁直下に断面三角形の隆帯が巡り、環状の把手1点が付される。胴部にはL無節の縄文が横位回転で施文されている。口径22cm、現存高18cmを測る。

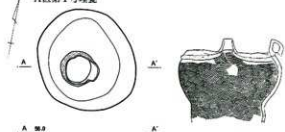
**A区第2号埋堯** (第275図・第277図)

G-8区に所在する。深鉢胴下半部が破片の状態で出土した。掘り方は円形のビットで直径42cm、深さ21cmを測る。土器は遺構検出面近くで出土した。

旧番号	新番号	旧番号	新番号
1	1	15	欠番
2	2	16	SJ60埋堯
3	欠番	17	SJ72埋堯
4	欠番	18	SJ59埋堯
5	欠番	19	SJ59埋堯
6	欠番	20	欠番
7	SJ11埋堯	21	SJ57埋堯
8	SJ11埋堯	22	SJ85埋堯
9	SJ11埋堯	23	23
10	SJ33埋堯	24	欠番
11	11	25	25
12	12	26	欠番
13	13	27	SJ64埋堯
14	14		

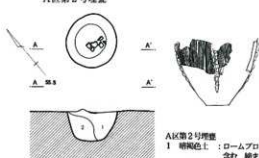
第275図 A区埋甕(1)

A区第1号埋甕



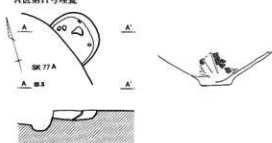
A区第1号埋甕  
1 暗褐色土：ローム粒子若干含む

A区第2号埋甕

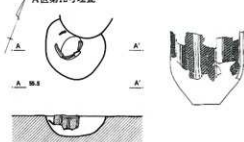


A区第2号埋甕  
1 暗褐色土：ロームブロック多く含む 締まり強  
2 暗褐色土：ロームブロック非常に多く含む 締まり強

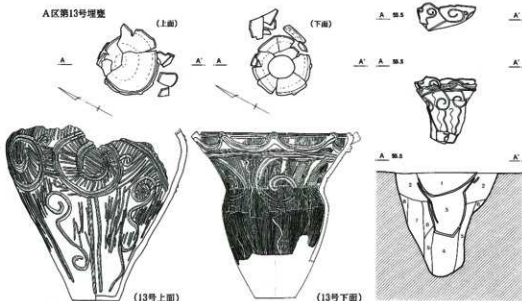
A区第11号埋甕



A区第12号埋甕



A区第13号埋甕

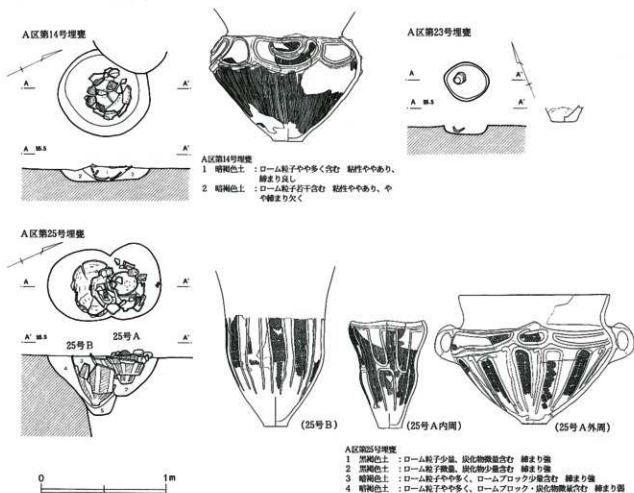


A区第13号埋甕  
1 暗褐色土：ローム粒子やや多く、焼土粒子微量含む  
2 暗褐色土：ローム粒子少量含む  
3 暗褐色土：ローム粒子・焼土粒子やや多く、炭化物微量含む  
4 暗褐色土：ローム粒子多く、ロームブロック・炭化物少量含む

5 褐色土：ローム粒子・ロームブロック多く含む 締まり弱  
6 暗褐色土：ローム主体 締まり弱  
7 暗褐色土：ロームブロック主体とし、少量の褐色土含む  
8 暗褐色土：ローム粒子多く含む 締まり弱



第276図 A区埋壺(2)



### 出土土器 (第277図 2)

曾利系の隆帯文土器で、胴下半部の中段部分が残存する。指頭状のものによる押捺を伴う隆帯が垂下する。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

#### A区第11号埋壺 (第275図・第277図)

G-6区に所在する。第77A号土壌に切られる。両耳壺胴下半部が破片の状態で出土した。掘り方は円形のビットで、直径43cm、深さ8cmを測る。

#### 出土土器 (第277図 3)

両耳壺の胴下半部である。磨消し懸垂文が垂下し、地文はR L単筋の縄文である。底径8cmを測る。

#### A区第12号埋壺 (第275図・第277図)

第49号住居跡覆土中から出土した。深鉢胴中段を正位に埋設したものである。掘り方は円形のビットで、直径48cm、深さ20cmを測る。土器はビット底面から4

～5cm浮いた状態で埋設されていた。

#### 出土土器 (第277図 4)

キャリバー類深鉢の胴部中段である。磨消し懸垂文が垂下し、地文はR L単筋縦位回転の縄文である。

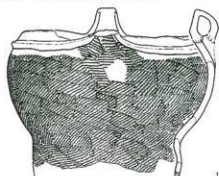
#### A区第13号埋壺 (第275図・第278図)

E-5区に所在する。第43号住居跡の覆土を切っている。本埋壺は2個体の深鉢を入れ子の状態で埋設したものである。掘り方は円形のビットで、直径80cm、深さ84cmを測る。土器はビット底面から28cm浮いた状態で埋設されていた。

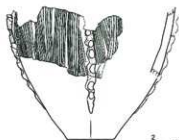
#### 出土土器 (第278図)

1は埋壺下位の土器である口縁から胴下半部までが復元し得たが、調査時点では底部までが残存した。口縁部文様帯を持つ深鉢だが、器形そのものは曾利式の造りを踏襲している。

第277图 A区埋藏出土土器(1)



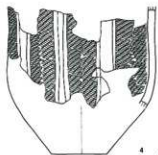
1 A区1号埋藏



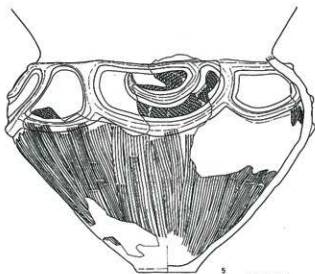
2 A区2号埋藏



3 A区第11号埋藏



4 A区12号埋藏



5 A区14号埋藏



6 A区23号埋藏

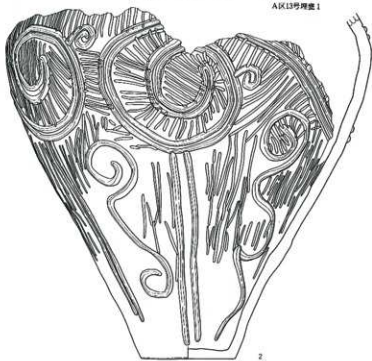




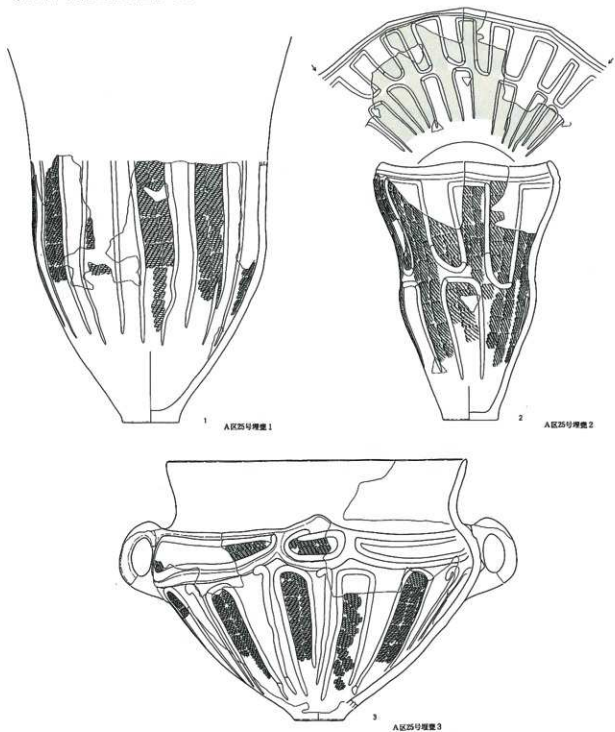
第278图 A区埋藏出土土器(2)



A区口沿盖1



第279图 A区埋藏出土土器(3)



0 10cm

口縁部文様帯は二本隆帯の繋弧文で、文様帯下端は3～4本の沈線で区画する。胴部には三本沈線で渦巻文が描かれ、単沈線の蛇行懸垂文が垂下する。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。口径39.5cm、現存高35.2cmを測る。

2は1の口縁に斜めに乗った状態で出土した。唐草文系の深鉢で、口縁から頸部を欠失する。二本隆帯の大柄な横S字モチーフが描かれる。胴下半部には二本隆帯の懸垂文が垂下し、両端閉塞するわらび手モチーフが描かれる。地文は棒状工具の短沈線がモチーフに沿って充填施文される。復元最大径48cm、現存高46cmを測る。

#### A区第14号埋甕 (第276図・第277図)

G-5区に所在する。両耳壺を正位に埋設したものである。掘り方は直径73cm、深さ10cmの円形のビットで、土器はビット底面に底を着けた状態で埋設されている。

#### 出土土器 (第277図5)

両耳壺で、底部から胴上半部にかけて残存する。胴上半部にキャリバー類深鉢口縁部に由来する文様帯を配する。地文は胴上半部にはL R単節の縄文が、胴下半部には櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。復元最大径40cm、現存高28.6cmを測る。

#### A区第23号埋甕 (第276図・第277図)

F-4区に所在する。深鉢胴下半部を正位に埋設する。掘り方は長径36cm、短径30cmの楕円形で、主軸はN-69°-Wを指す。土器はビット底面からわずかに浮いた状態で出土した。

#### 出土土器 (第277図6)

無文の深鉢で、底部付近のみが残存する。底径6.8cmを測る。

#### A区第25号埋甕 (第276図・第279図)

E-3区に所在し、第1号掘立柱建物跡を切っている。掘り方の形状や土壌観察の所見から2基の埋甕の切り合いと考えられ、それぞれ25号A、25号Bと命名した。新旧関係は前者が後者を切っている。

25号Aは両耳壺内部に小型の深鉢を入れ子にしたも

のである。掘り方は直径60cm、深さ30cmの不整形円形のビットで、土器はビット底面から10cmあまり浮いた状態で埋設されている。

25号Bは深鉢胴下半部を正位に埋設したものである。掘り方は長径58cm、深さ46cmの楕円形のビットで、主軸はN-24°-Eを指す。土器はビット底面から5cmほど浮いた状態で埋設されている。

#### 出土土器 (第279図)

1は25号Bの埋設土器である。キャリバー類深鉢胴下半部で、磨消し懸垂文が垂下する。地文はR L単節縦位回転の縄文である。底径7.4cm、現存高34.8cmを測る。

2は25号A内周の埋甕である。口縁の一部を欠失する。緩やかな波状口縁で、口縁直下に1条の沈線が巡る。胴上半部には波頂部平坦な波状の沈線が巡り、胴下半部には逆U字の沈線区画が描かれる。地文はL無節縦位回転の縄文で、胴下半部で部分的に磨り消される。口径23cm、底径7cm、器高34.7cmを測る。

3は両耳壺である。底部を欠失するほか、口縁から胴上半部にかけて部分的に欠失している。キャリバー類深鉢の口縁部に由来する胴上半部の文様帯を持ち、橋梁状の把手が配される。肩部正面に山形突起を付す。胴下半部には逆U字の沈線区画とわらび手状の沈線が交互に描かれる。地文はR L単節の縄文である。

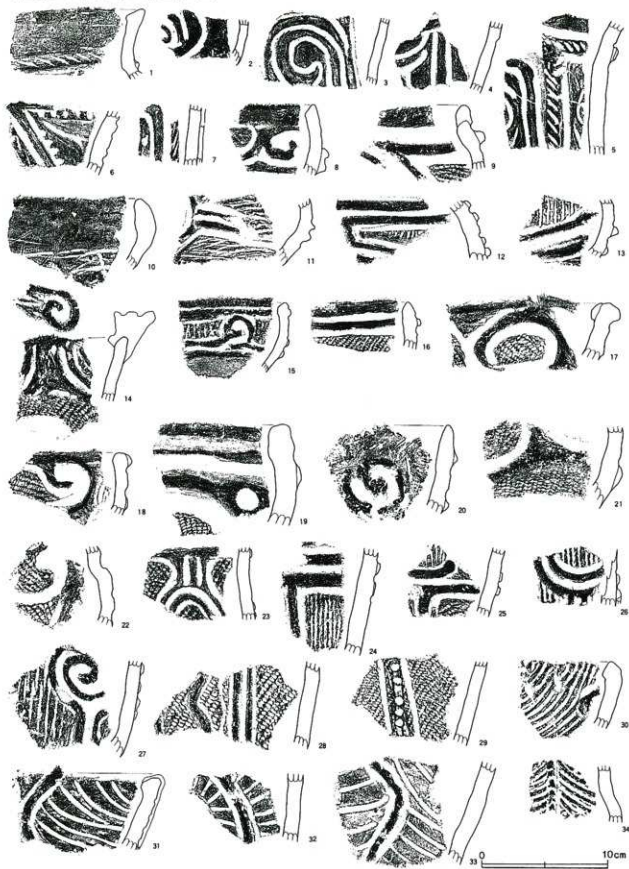
#### (5) グリッド出土土器 (第280図～第282図)

1～7は勝坂式の流れをくむ土器である。刻みを有する隆帯により器面を区画し、内部に棒状工具による沈線文を描く。8～20はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。中期後葉から末葉の各時期のものが存在する。21・22はこれに類似するが、両耳壺胴上半部の文様帯である。

23～28は二本隆帯による渦巻文や懸垂文が描かれる胴部破片である。28は表面に半裁竹管状工具内面のなぞりを加えた扁平な隆帯である。29は三本沈線の懸垂文で、中央の沈線に沿って棒状工具先端による刺突列が施文される。

30～36は唐草文系の土器である。30は重弧文の描か

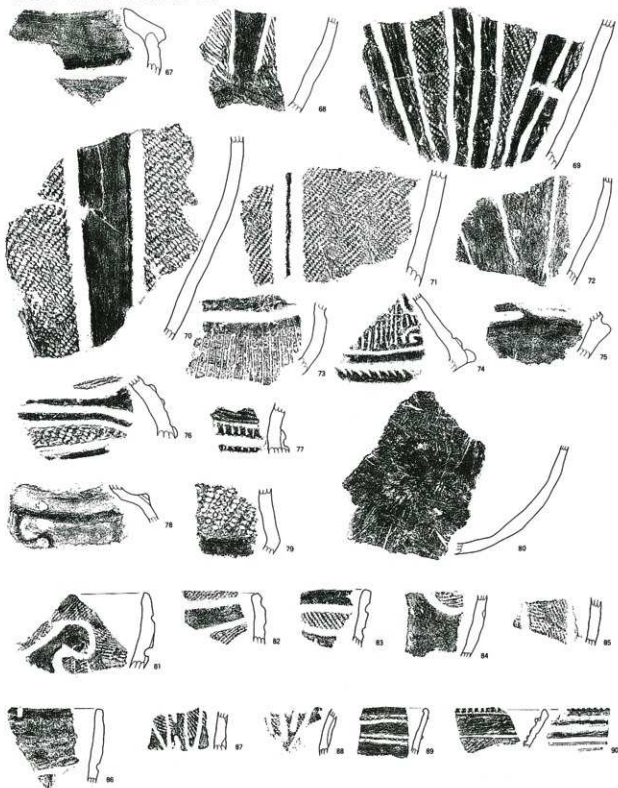
第280図 A区グリッド出土土器(1)



第281図 A区グリッド出土土器(2)



第282図 A区グリッド出土土器 (3)



0 10cm

れる口縁部である。半裁竹管状工具の平行沈線により重弧文が描かれ、波状の隆帯が垂下する。31は棒状工具による重弧文である。

32・33は半裁竹管状工具内面のなぞりを加えた隆帯による渦巻文や蛇行懸垂文が描かれ、地文として棒状工具の短沈線による樹枝状・放射状モチーフが描かれる。34は縦位の結節浮線文と斜行する半裁竹管状工具の平行沈線により樹枝状のモチーフが描かれる。35・36は二本隆帯の渦巻文が描かれ、櫛歯状工具の条線を地文とする。

37は曾利系の土器の口縁部である。口縁下に幅広の無文帯を持ち、胴部との境を1条の隆帯で区画する。地文は半裁竹管状工具の条線である。38は37に類似の土器で、隆帯上に瘤状の突起を配し、胴部には半裁竹管状工具の平行沈線が垂下する。地文も同一工具による条線である。39は櫛歯状工具の条線だけが施文される口縁部である。40～43は無文の口縁部である。40のみ胴部との境に断面三角形の隆帯が巡り、隆帯上に縄文が施文される。

44～49は連弧文系の土器である。44は交互刺突文を伴う平行沈線が巡る口縁部、45は平行沈線による胴部中段の区画である。46は磨消し懸垂文がみられる。49は胴部中段の区画から波状沈線が垂下する。

50・52・53は矢羽根状の沈線を地文とする曾利系の深鉢である。50は二本隆帯の懸垂文が垂下する。56は広口壺形土器で、無文の頸部と胴部の境界をなす隆帯である。

57～67は中期末葉の土器群中口縁部文様帯を持たない群である。57は口縁下に1条の沈線が巡り、胴上半部に鋸歯状の磨消しモチーフが描かれる。58は玉抱き文の描かれる胴上半部である。59は胴部中段で、上下に鋸歯状モチーフが交差する。

60・61は掘山顔の口縁部である。両側になぞりを伴う隆帯によって渦巻文やパネル状の区画が描かれる。

62は口縁下に1条の沈線が巡り、胴部に逆U字の沈線区画が描かれる。

63は口縁下に1条の隆帯が巡り、隆帯上面に縄文が

施文される。胴部には断面三角形の隆帯が垂下し、幅広の一段懸垂文を構成する。地文はR L単節の縄文である。64は口縁下に断面三角形の隆帯が巡る。口端部には環状の把手が付される。地文はR L単節の縄文である。65・66は64に類似するが波状口縁で、波頂部に縦位のつまみ状の突起を形成する。地文はいずれもR L単節の縄文である。67は口縁内屈して、胴部との間に段を形成する。

68～70は磨消し懸垂文の胴部である。68の地文はL無節縦位回転の縄文である。69は三本沈線の磨消し懸垂文である。70は二本沈線の磨消し懸垂文で、地文はR L単節の縄文である。71は微隆起線の懸垂文である。両側には深い沈線によるなぞりが施される。地文はR L単節縦位回転の縄文である。72は平行沈線のみの懸垂文が垂下する。

73は浅鉢胴上半部である。口縁部は無文で胴部との境を1条の沈線で区画する。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

74～77は胴上半部に文様帯を持つ浅鉢である。78は有孔鑄付き土器である。肩部に断面三角形の鑄が巡り、ここに縦位の貫通孔が穿たれる。胴部には微隆起線によるJ字モチーフが描かれる。79はくの字に張り出す胴下半部で、R L単節の縄文が施文される。80は浅鉢胴下半部で、器面が著しく削り込まれており、丸底状を呈する特異な器形である。

81～88は後期初頭称名寺式である。81は山形波状口縁で、波頂部にJ字文が描かれる。82・83は口縁下に区画文が描かれる。84は加曾利E系の深鉢で、口縁下に1条の沈線が巡り、胴部に一段懸垂文が垂下する。口唇には棒状工具による刻みが施される。

87は縦位の平行沈線間に列点文が充填され、左右に菱形の磨消しモチーフが描かれる。88は磨消しモチーフ内部に列点文が充填される。

89・90は後期前葉の堀之内2式である。口端内屈し、口縁下2条の細線文が巡る。90は口端内屈して刻みを有し、内面に隆帯+平行沈線の内文を描く。外面は横位の平行沈線間に縄文を施文する。

## (6) 石器

### 先土器時代 (第283図)

1は縄文時代の包含層から出土したナイフ形石器である。両縁調整で、先端部が欠損するが、鋭角をなすものと思われる。基部の左は両面から、右は裏面からのみ剥離調整を行っている。石材は粘板岩を使用している。

### 縄文時代 (第284図～第294図)

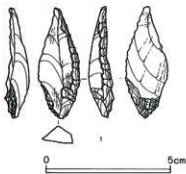
縄文時代の遺構覆土を中心に多数の石器が出土したが、完形品を中心に図示することとした。個別の資料の計測値等については後段の一覧表に委ね、ここでは特徴的なものについて記載する。

1は黒曜石製の尖頭器である。長楕円形を呈し、先端部に丸味を帯びるが、これは表裏からの細かな剥離調整によるもので、先端欠損後の再加工によるものであろう。全長4.2cm、幅1.7cmを測る。

石鏃は大半が凹基鏃で、これに少数の平基鏃が混じる。平基とされるものには半根製のなものも含まれる。特筆すべきは27・28・34・42・45に挙げたような粗大なものが混じる点で、先端部の加工が徹底せず、両面加工の剥片に紛らわしいものまで含めると、図示した以外にも相当数が出土している。42は一方の返しを欠損する逆V字形の凹基鏃で、裏面に広く自然面を残している。

9は板状節理の礫片を、周囲を簡易に打ち欠いて三角形凹基の形状に整えたものである。石鏃の形態をシンボリックに表現したものと見え、実用品とは考えにくい。

### 第283図 A区出土石器(1)



19は縦長剥片を両面加工したもので、返しを全く持たない。先端部は一度破損したものを再加工しているものと思われる。

40・44・50等は幅広い逆V字形を呈し、全体の器形の中で、先端より返しの部分が強調されるものである。先端部が欠損した後の再加工によって生じた二次的な形態の可能性もある。

石鏃は軸部の破片を含めれば10点以上が出土しているが、ここでは完形品3点を図示した。58は比較的小型で楕円形の頭部から太く長い軸部へと連続するものである。石材はチャートを使用する。

59は三角形の剥片の一端を両面加工によって軸部とし、残る二端を簡易に整形して横楕円形のつまみ状の頭部としたものである。石材は黒曜石である。

60は幅広い軸部と小型逆台形の頭部からなっており、頭部と軸部との間の変化に乏しい。頭部末端に自然面を残す。横長の剥片を使用しており、裏面に主要剥離面を残す。石材はチャートである。

61・62は磨製石斧である。いずれも断面が三味線銅形を呈する定角形の磨製石斧である。61は刃部を欠損し、表裏の側縁に数カ所の剥離が観察される。62は刃部側のおよそ1/2を欠損する。全体に研磨調整の線状痕がみられ、部分的に敲打整形の痕を残している。

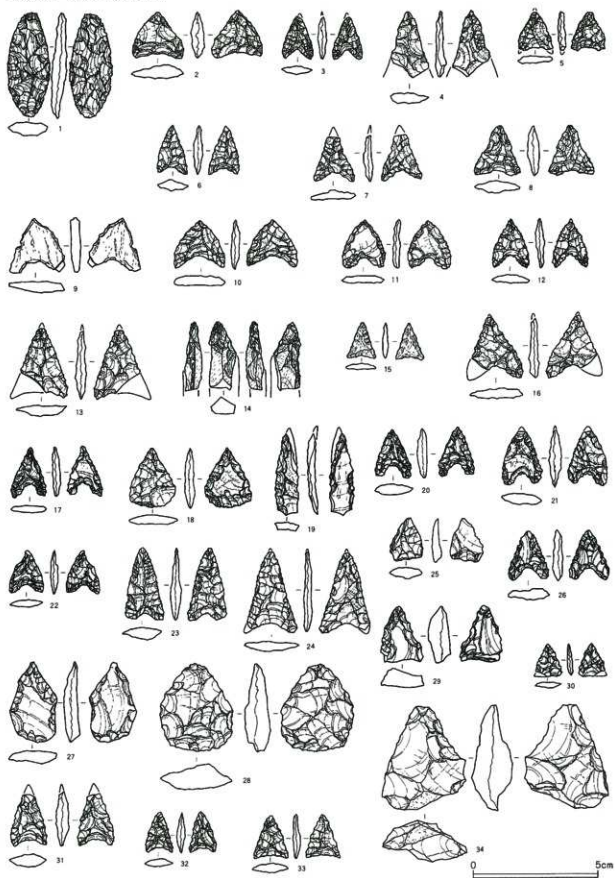
打製石斧は本遺跡出土の石器の主体を占めるもので、短冊形・撥形を主体として少量の分銅形を交える。

63・65は原石の荒割りの状態を示すものと思われる。65は数度の大まかな打撃によって断面台形の短冊形に整形した状態で、刃部側に節理面を残す。63は略撥形の整形が完了し、表面を中心に調整剥離が開始されつつある状態である。本資料が制作途中で放棄されたのは、胴部中段の袂りの形成が上手くいかなかったからであろうか。

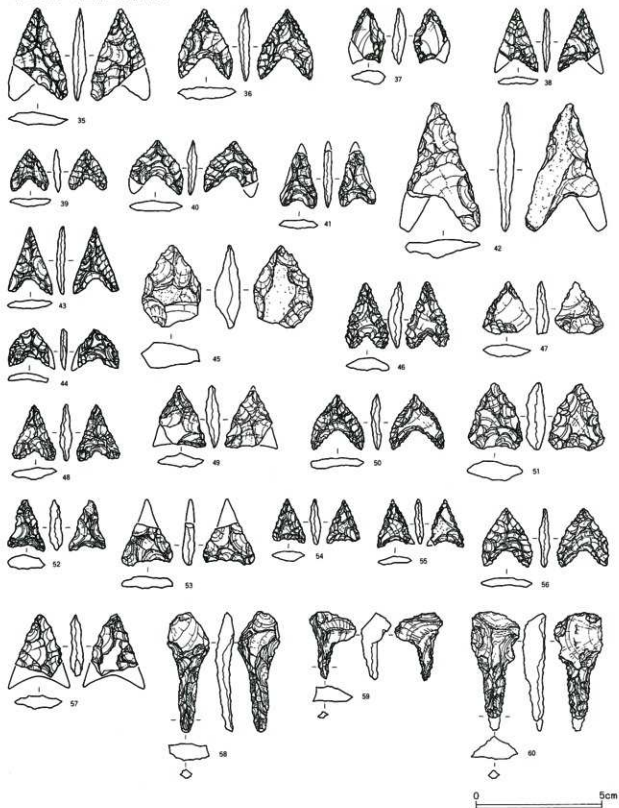
64・67・68・70・114等は表面ないし裏面に広く自然面を残す。形状は短冊形・撥形の両者が存在するようだ。64・114は表面に自然面、裏面に節理面を残している。114は分銅形に近いが極めて肉厚で刃部も鈍角である。制作途中の状態を示すものであるかもしれない。



第284图 A区出土石器(2)



第285图 A区出土石器(3)

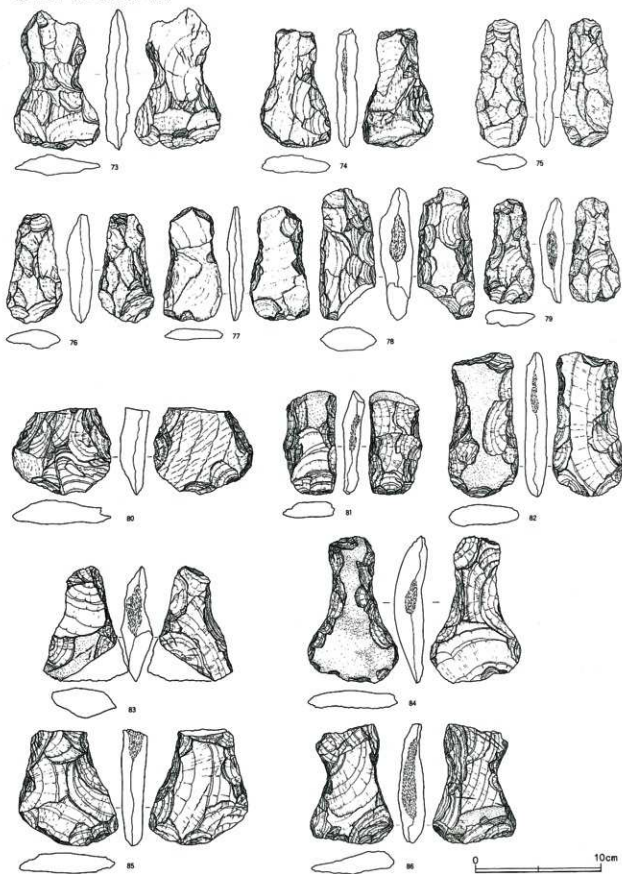


第286图 A区出土石器(4)

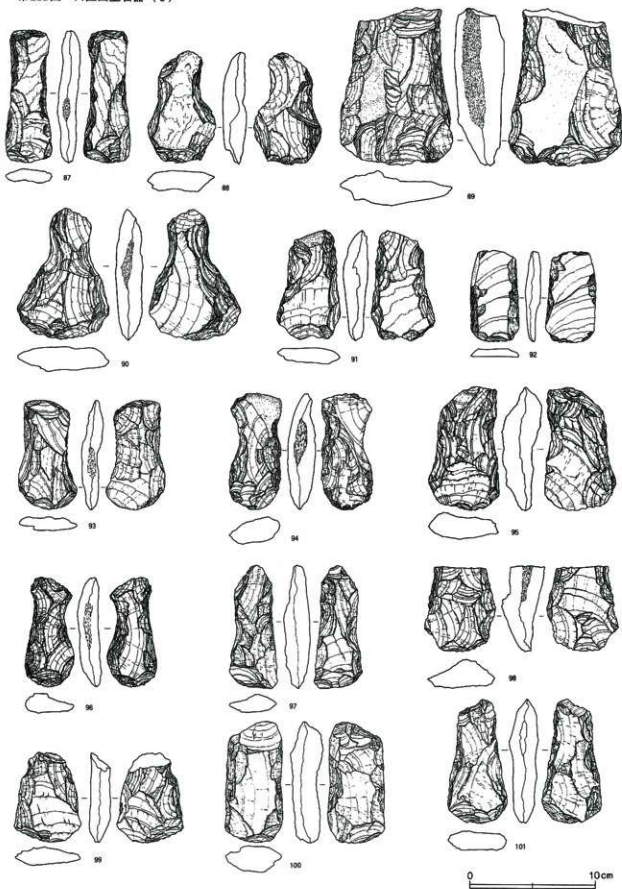


0 10cm

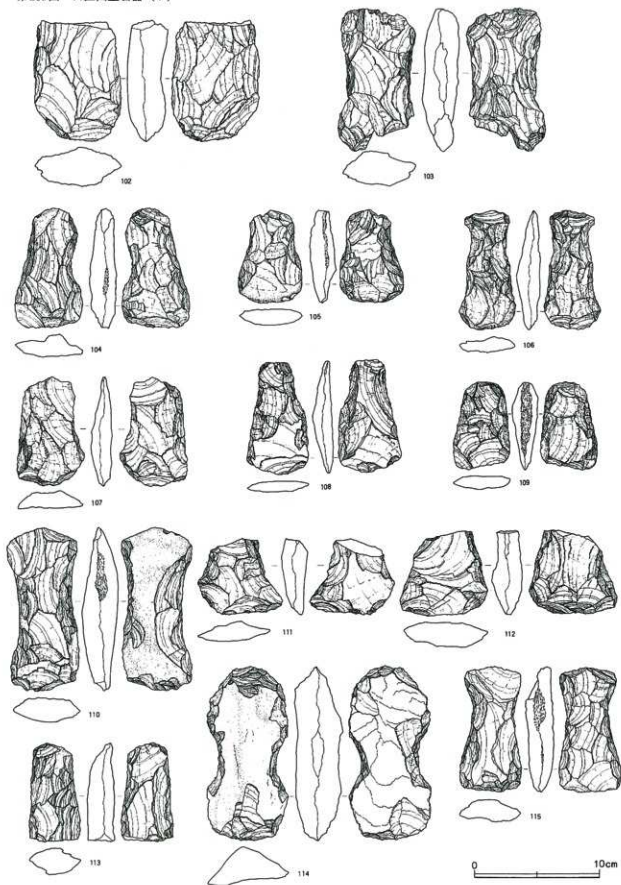
第287图 A区出土石器(5)



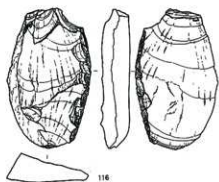
第288图 A区出土石器(6)



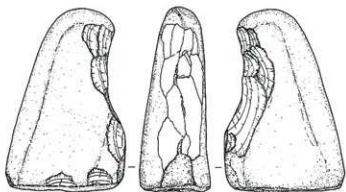
第289图 A区出土石器(7)



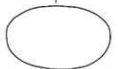
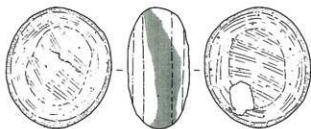
第290图 A区出土石器(8)



116

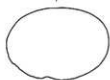
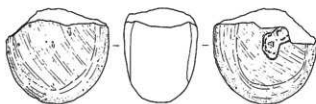


117

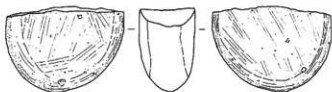


118

.....スス付着



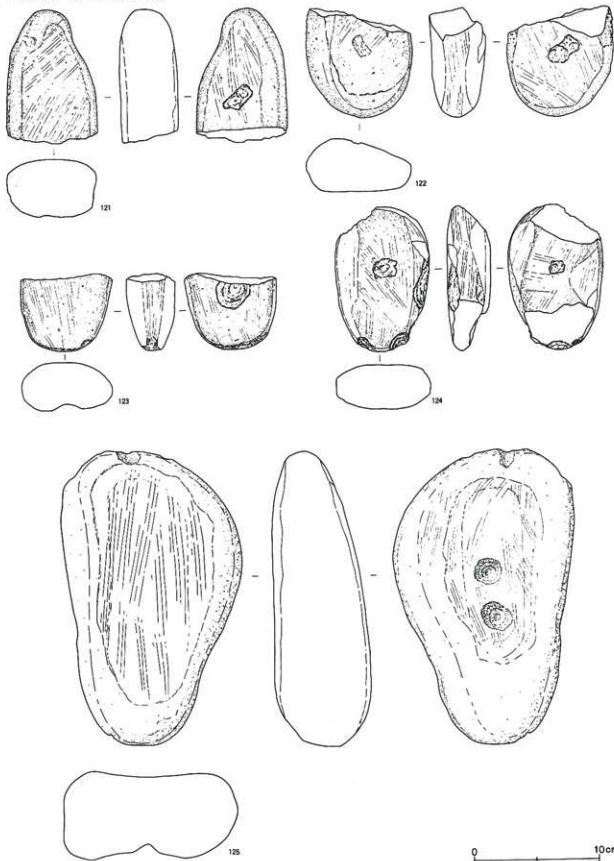
119



120

0 10cm

第291图 A区出土石器(9)





い。

81はくさび様の特異な打製石斧である。やや寸詰まりの短冊形で、基部末端に自然面を残す。表面には節理面を残している。92もこれに類似し、一側縁に自然面を残している。

83・84・90は刃部が扇形に開く極端な撥形を示す。短冊形のものに比べ背面が丸く張り出す強い湾曲を示している。

109は寸詰まりの胴体に比較的鋭角の刃部を持ち、基部に細かな調整剥離を加えて丸い握り状につくり出している。側縁にもつぶし加工を徹底することで胴体の厚味・丸味を強調している。折損した刃部の再加工とも考えられるだろう。

105もこれに類似するが、刃部表面に自然面を残している。

116は砂岩製の大型剥片を利用した礫石器で、一種のスクレイパーであろう。縦長の剥片の右側縁に自然面を残し、左側縁に両面からの剥離によって刃部をつくり出す。この種の、石核や剥片に手を加えた簡素な石器は本遺跡出土資料中に少なからず存在する。

117は敲打具と思われるもので、早期のスタンプ形石器に類似する。早期の遺物の混入かとも思われるが、これに対応する燃糸文期の出土遺物に乏しく、一方で同種の石器は、C・D区において縄文時代中期の遺構に伴ってまとまった数出土している。

台形の自然礫の一側縁に両面から剥離を加え、握りをつくり出している。底面には潰し様の使用痕が観察される。「スタンプ」の通称を持ちながら、この種の石器の底面にこれほど明確な使用痕が残るのはむしろ珍しいことではなかろうか。

磨石は自然礫を原型のまま使用した不定形かつ簡易なものを除外すると、形態上二者が存在する。

A種は118~120のような比較的柔らかい石材を略円形に加工し、表裏両面に平坦な使用面を持つものである。円形の磨石ということで、使用方向は一定していない。

B種は123・124のように、硬砂岩や緻密な安山岩な

ど硬質の石材を使用した小半円の磨石で、使用方向は一定して縦断面が紡錘形となり、しばしば124の様な多面体を形成する。一種の砥石を連想させる使用状態である。

両者は外見のみならず用途の上でも別個の性格を有していた可能性があるだろう。往々にして表裏に凹み石としての再利用がみられるが、そのこと自体に深い意味はないものと思われる。

125は自然礫の平坦面を利用した簡易な石皿である。不整な長楕円形の礫の表裏に生じた自然の凹みを使用したものとみられ、礫の長軸方向に向かう使用痕がみられる。一方の使用面に凹み石としての転用が観察される。

長軸側の一端にスリットを有しているのは、縄を掛けた状態で何かの重りとして使用されたものであろうか。

石皿は結晶片岩系の大型のものと堆積岩系の小型のものが存在する。後者は縁辺が丸く加工される例が多く、手に乗せたり膝に抱えた状態での使用が想像される。

126は表裏に使用面を持ち、特に表面の使用面は新旧のものが切り合っている。

127は比較的小型で楕円形の石皿で、使用面の一端が「掃き出し口」風に開口している。132・135・136は頻繁な使用により底の抜けた状態になっている。

137は第44号住居跡炉跡上面から出土した緑泥片岩製の大型石皿で、縦位に二分割されたものがさらに横二分割された状態で出土した。

板状節理の板石を銅張りの隅丸長方形に整形した上でその一面のみを使用している。

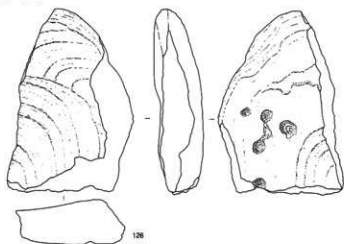
表面の縁辺部および裏面全体が雨垂れ石として使用されている。長径55cmを測る長大なものである。

## (7) 土・石製品 (第295図)

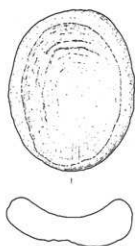
1は第1号住居跡炉跡から出土したもので、台付き土器の脚台部である。無文で、四方に貫通孔を有する。

2は第46号住居跡覆土中から出土したもので、別の小型深鉢とセットの状態出土している。器厚2~3

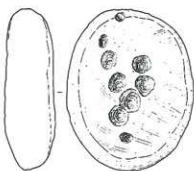
第292図 A区出土石器(10)



126



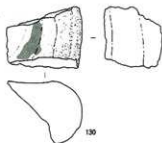
127



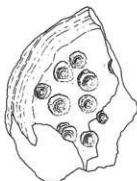
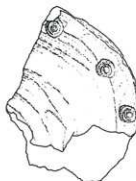
128



129



130



131

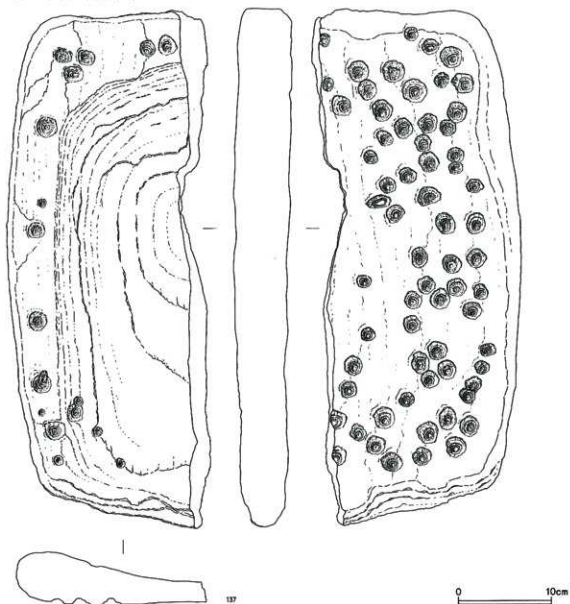
■ .....スス付着

0 10cm

第293图 A区出土石器(11)



第294図 A区出土石器 (12)



mmの非常に薄手の土器で、底部が張り出し、口縁のすばまった樽形である。

胴下半部には棒状工具先端を用いた蛇行懸垂文が垂下する。胴部最大径3.7cmで底径もこれに等しい。口径は2.2cm、器高は4.2cmを測る。

3は第41号住居跡出土のミニチュア土器である。底部から口縁に向かって外反しつつ開くさかずき形で、内外面とも無文で、手づくねの痕跡を残す。口径2.1cm、器高1.2cmを測る。

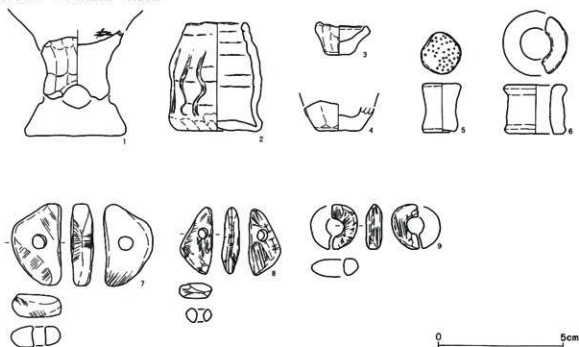
4は第4号住居跡出土のミニチュア土器底部であ

る。無文で3と同様の指頭圧痕がみられる。底径1.8cmを測る。

5はグリッド一括出土で、鼓形の耳飾りである。両端に尖った工具の先端による刺突文が施文される。直径1.7cm、厚さ1.9cmを測る。6は第46号住居跡出土の耳飾りである。中央に貫通孔を有する。直径1.9cm、厚さ1.9cmを測る。

7は第152号土壌底面から出土したヒスイ製の垂飾である。隅丸の三角形で、中央に貫通孔を有する。全長3.2cm、幅2cm、厚さ9mmを測る。

第295図 A区出土土・石製品



8は第47号住居跡から出土した石製垂飾である。暗茶褐色の平滑な石材を用いている。隅丸の三角形で、一端に貫通孔を有する。全長2.7cm、幅1.2cm、厚さ7mmを測る。

9はグリッド出土の球状耳飾りである。滑石製で、中央から2つに折損している。折れ口の部分にも擦痕がみられ、破損後何らかの再使用が図られたことを示している。直径約1.8cmであったと推定される。

図版番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
第284図 1	表土一括	尖頭器	4.20	1.70	0.50	3.09	黒曜石	
第284図 2	SJ2	石鏃	1.90	2.10	0.50	1.44	チャート	
第284図 3	SJ2	石鏃	1.70	1.20	0.40	0.47	チャート	
第284図 4	SJ2	石鏃	2.60	1.60	0.40	1.16	チャート	
第284図 5	SJ2	石鏃	1.50	1.40	0.30	0.46	チャート	
第284図 6	SJ2	石鏃	1.90	1.30	0.40	0.56	チャート	
第284図 7	SJ2	石鏃	(1.80)	1.80	0.40	0.60	チャート	
第284図 8	SJ2	石鏃	2.00	1.80	0.50	1.16	チャート	
第284図 9	SJ6	石鏃	2.20	2.20	0.50	1.87	絹雲母片岩	
第284図 10	SJ6	石鏃	2.00	2.00	0.40	1.16	チャート	
第284図 11	SJ6	石鏃	1.90	1.70	0.30	0.86	チャート	
第284図 12	SJ7	石鏃	1.90	1.45	0.30	0.63	チャート	
第284図 13	SJ9	石鏃	(2.65)	(2.10)	0.40	1.40	チャート	
第284図 14	SJ9	石鏃	(2.70)	(1.20)	0.70	1.51	黒曜石	
第284図 15	SJ19	石鏃	0.90	1.20	0.20	0.24	ホルンフェルス	
第284図 16	SJ19	石鏃	(2.40)	(2.10)	0.40	1.26	チャート	
第284図 17	SJ26	石鏃	2.00	1.40	0.45	0.61	チャート	
第284図 18	SJ37	石鏃	2.40	1.90	0.40	1.40	チャート	
第284図 19	SJ37	石鏃	(3.20)	0.90	0.45	1.00	チャート	
第284図 20	SJ39	石鏃	2.00	1.50	0.40	0.71	黒曜石	
第284図 21	SJ39	石鏃	2.30	1.60	0.50	1.28	チャート	

図版番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
第284図 22	SJ39	石 鏃	1.70	1.35	0.30	0.52	チャート	
第284図 23	SJ39	石 鏃	2.90	1.60	0.50	1.39	チャート	
第284図 24	SJ40	石 鏃	3.20	2.00	0.40	1.50	頁 岩	
第284図 25	SJ40	石 鏃	1.70	1.30	0.40	0.77	チャート	
第284図 26	SJ44	石 鏃	2.00	1.60	0.40	0.89	黒曜石	
第284図 27	SJ44	石 鏃	3.20	1.90	0.50	3.56	チャート	
第284図 28	SJ45	石 鏃	3.50	2.90	1.10	9.09	チャート	
第284図 29	SJ46	石 鏃	2.20	1.70	0.75	2.22	黒曜石	
第284図 30	SJ46	石 鏃	(1.30)	(1.05)	0.20	0.20	黒曜石	
第284図 31	SJ46	石 鏃	(2.10)	1.50	0.50	1.30	チャート	
第284図 32	SJ46	石 鏃	1.15	1.10	0.35	0.34	黒曜石	
第284図 33	SJ46	石 鏃	1.80	1.30	0.35	0.60	ホルンフェルス	
第284図 34	SJ48	石 鏃	4.20	3.40	1.70	14.48	チャート	
第285図 35	SJ48	石 鏃	(3.60)	(2.40)	0.60	2.38	チャート	
第285図 36	SJ48	石 鏃	2.90	2.30	0.45	1.92	チャート	
第285図 37	SJ48	石 鏃	(2.20)	(1.40)	0.50	1.11	黒曜石	
第285図 38	SJ52	石 鏃	(2.10)	(1.60)	0.30	0.69	チャート	
第285図 39	SJ55	石 鏃	1.70	1.50	0.40	0.40	黒曜石	
第285図 40	SJ55	石 鏃	(2.20)	(2.10)	0.40	1.12	チャート	
第285図 41	SJ55	石 鏃	(2.20)	1.50	0.85	0.88	チャート	
第285図 42	SJ55	石 鏃	(5.10)	(3.00)	0.70	5.90	ホルンフェルス	
第285図 43	SJ55	石 鏃	2.70	1.80	0.35	0.87	チャート	
第285図 44	SJ56 埋差2	石 鏃	(1.60)	(1.60)	0.30	0.57	黒曜石	
第285図 45	SJ56 埋差2	石 鏃	3.30	2.35	1.00	6.75	チャート	
第285図 46	SJ56 埋差2	石 鏃	2.60	1.70	0.50	1.58	チャート	
第285図 47	SJ56 埋差2	石 鏃	2.10	1.90	0.50	1.65	粘板岩	
第285図 48	SJ62	石 鏃	2.20	1.80	0.50	0.97	チャート	
第285図 49	SJ95	石 鏃	(2.50)	(1.80)	0.60	1.70	チャート	
第285図 50	SK16	石 鏃	2.10	2.15	0.40	0.99	チャート	
第285図 51	SK18	石 鏃	2.70	2.20	0.80	4.49	チャート	
第285図 52		石 鏃	2.00	1.50	0.60	1.05	チャート	
第285図 53	SK101	石 鏃	(1.70)	2.00	0.50	1.50	チャート	
第285図 54	SK101	石 鏃	1.70	1.30	0.40	0.58	黒曜石	
第285図 55	SK144	石 鏃	(1.60)	1.30	0.35	0.47	黒曜石	
第285図 56	SK154	石 鏃	2.30	2.00	0.45	1.23	チャート	
第285図 57		石 鏃	(2.50)	(1.90)	0.55	1.81	チャート	
第285図 58	SJ41	石 鏃	5.40	1.70	0.60	3.67	チャート	
第285図 59	SJ46	石 鏃	2.70	1.90	0.70	1.88	黒曜石	
第285図 60	E-9 P-3	石 鏃	(4.20)	1.90	1.00	5.34	チャート	
第286図 61	SJ48	磨 斧	(10.10)	(4.80)	2.70	244.00	砂 岩	
第286図 62	SJ48	磨 斧	8.10	5.30	3.40	263.00	砂 岩	
第286図 63	SJ6	打 斧	9.20	6.40	1.40	120.00	粘板岩	
第286図 64	SJ7	打 斧	9.80	3.80	1.40	80.00	緑泥片岩	
第286図 65	SJ7	打 斧	10.80	6.20	2.60	213.00	ホルンフェルス	
第286図 66	SJ18	打 斧	(5.20)	7.10	1.70	87.00	粘板岩	
第286図 67	SJ7	打 斧	11.10	7.00	2.20	294.00	砂 岩	
第286図 68	SJ19	打 斧	(7.40)	3.80	1.30	54.00	砂 岩	
第286図 69	SJ19	打 斧	(8.00)	3.10	1.90	57.00	ホルンフェルス	
第286図 70	SJ19	打 斧	13.20	4.90	2.10	178.00	砂 岩	
第286図 71	SJ23	打 斧	11.00	5.10	1.40	127.00	ホルンフェルス	
第286図 72	SJ24	打 斧	15.70	5.80	2.20	286.00	粘板岩	
第287図 73	SJ26	打 斧	11.10	6.80	1.70	131.00	ホルンフェルス	
第287図 74	SJ26	打 斧	9.50	5.50	1.70	87.00	ホルンフェルス	
第287図 75	SJ39 P-2	打 斧	10.15	3.90	1.65	72.00	ホルンフェルス	
第287図 76	SJ39	打 斧	8.60	4.30	1.50	74.00	ホルンフェルス	
第287図 77	SJ39	打 斧	8.90	4.70	0.90	55.00	粘板岩	
第287図 78	SJ39	打 斧	10.10	4.40	1.90	134.00	砂 岩	
第287図 79	SJ39	打 斧	8.20	3.90	1.30	60.00	ホルンフェルス	

図版番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
第287図 80	SJ39	打斧	(6.70)	7.90	2.00	128.00	ホルンフェルス	
第287図 81	SJ40	打斧	8.20	4.10	1.20	70.00	砂岩	
第287図 82	SJ40	打斧	11.10	5.60	1.60	149.00	砂岩	
第287図 83	SJ40	打斧	(7.70)	(5.20)	2.30	85.00	砂岩	
第287図 84	SJ43	打斧	11.50	7.20	1.40	162.00	砂岩	
第287図 85	SJ43	打斧	(9.00)	7.55	1.55	162.00	砂岩	
第287図 86	SJ44	打斧	9.45	6.70	1.50	124.00	砂岩	
第288図 87	SJ44	打斧	10.50	3.70	1.00	77.00	ホルンフェルス	
第288図 88	SJ44	打斧	8.70	5.40	1.60	87.00	チャート	
第288図 89	SJ45	打斧	(12.20)	9.00	2.60	547.00	砂岩	
第288図 90	SJ46	打斧	10.40	7.40	1.90	157.00	ホルンフェルス	
第288図 91	SJ46	打斧	8.60	5.00	1.20	91.00	ホルンフェルス	
第288図 92	SJ47	打斧	7.20	3.80	0.60	40.00	粘板岩	
第288図 93	SJ48	打斧	8.60	4.60	1.10	67.00	ホルンフェルス	
第288図 94	SJ48	打斧	9.15	4.00	1.80	96.00	ホルンフェルス	
第288図 95	SJ48 No298	打斧	9.75	5.55	1.75	166.00	ホルンフェルス	
第288図 96	SJ48 P-6	打斧	8.60	3.90	1.50	68.00	粘板岩	
第288図 97	SJ48	打斧	9.65	3.75	1.35	80.00	ホルンフェルス	
第288図 98	SJ48 一括	打斧	(6.60)	5.30	2.20	124.00	砂岩	
第288図 99	SJ48	打斧	(7.05)	5.30	1.40	81.00	ホルンフェルス	
第288図 100	SJ49	打斧	9.60	4.40	2.20	147.00	砂岩	
第288図 101	SJ49	打斧	9.90	4.70	1.50	95.00	ホルンフェルス	
第289図 102	SJ55	打斧	(9.40)	7.00	3.20	272.00	砂岩	
第289図 103	SJ55	打斧	11.20	5.80	2.70	219.00	ホルンフェルス	
第289図 104	SJ55	打斧	9.90	5.40	1.70	106.00	ホルンフェルス	
第289図 105	SJ61	打斧	7.35	5.05	1.25	80.00	ホルンフェルス	
第289図 106	SJ61	打斧	9.35	4.40	1.15	70.00	ホルンフェルス	
第289図 107	SJ62	打斧	8.70	5.35	1.35	78.00	ホルンフェルス	
第289図 108	SJ62 P-3	打斧	8.90	4.90	0.80	68.00	ホルンフェルス	
第289図 109	SJ62	打斧	6.60	4.50	1.05	69.00	砂岩	
第289図 110	SJ65	打斧	12.80	5.45	1.90	225.00	砂岩	
第289図 111		打斧	(5.80)	5.80	1.90	67.00	粘板岩	
第289図 112		打斧	(6.50)	6.70	1.90	112.00	砂岩	
第289図 113	SK101	打斧	(7.75)	4.10	2.05	90.00	砂岩	
第289図 114	SK144	打斧	13.80	6.50	2.60	355.00	ホルンフェルス	
第289図 115	埋藏25	打斧	9.90	4.90	1.70	114.00	砂岩	
第290図 116	SJ55	スタレーバー	11.20	6.70	2.00	196.00	ホルンフェルス	
第290図 117	SJ62	磨石	14.80	9.50	5.70	999.00	砂岩	
第290図 118	SJ16	磨石	9.60	8.40	5.00	590.00	安山岩	
第290図 119		磨石	(7.60)	8.20	5.80	513.00	花崗岩	
第290図 120	SK19	磨石	(6.80)	9.50	4.50	403.00	礫岩	
第291図 121	SK144A	磨石	(10.50)	7.10	4.60	554.00	安山岩	
第291図 122	SJ48	磨石	(8.65)	8.40	4.45	430.00	安山岩	
第291図 123	SJ49	磨石	(4.80)	7.30	3.80	240.00	安山岩	
第291図 124	SJ62	磨石	11.50	7.60	3.40	457.00	硬砂岩	
第291図 125	SJ43	石皿	23.30	13.90	6.90	3000.00	砂岩	
第292図 126	SJ10	石皿	(19.50)	(13.50)	4.70	1601.00	安山岩	
第292図 127	SJ37	石皿	17.20	13.70	4.50	1235.00	安山岩	
第292図 128	SJ43	石皿	(12.70)	(10.80)	3.10	773.00	結晶片岩	
第292図 129	SJ44	石皿	(21.80)	(8.40)	3.00	744.00	絹雲母片岩	
第292図 130	SJ47	石皿	(18.10)	(6.50)	6.40	287.00	安山岩	
第292図 131	SJ47	石皿	(17.60)	(14.10)	6.70	1899.00	絹雲母片岩	
第293図 132	SJ47	石皿	(27.00)	(12.40)	4.00	1513.00	緑泥片岩	
第293図 133	SJ48	石皿	(18.80)	(10.80)	4.50	715.00	緑泥片岩	
第293図 134	SJ47	石皿	(21.70)	(11.40)	5.00	1950.00	緑泥片岩	
第293図 135	SJ56	石皿	(22.50)	(12.00)	4.50	1455.00	緑泥片岩	
第293図 136	SJ68	石皿	(19.00)	(9.00)	3.30	659.00	緑泥片岩	
第294図 137	SJ44	石皿	(553.00)	(220.00)	(60.00)	10150.00	緑泥片岩	

## 報告書抄録

ふりがな	しゅくひがしいせき							
書名	宿東遺跡							
副書名	一般国道407号線埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第197集							
編著者名	細田勝・渡辺清志							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台四丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦1998(平成10)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
しゅくひがしいせき 宿東遺跡	埼玉県日高市 大字高萩字宿東 1662番地3他	242	135	35°53'20"	139°22'58"	19940401 ~ 19951231	13,900	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宿東遺跡	集落跡	縄文時代中期	竪穴住居跡 160 掘立柱建物跡 5 土壇 239 埋甕 8 配石遺構 1 溝 18		縄文土器 石器 土製品 石製品			



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第197集

---

日 高 市

---

**宿東遺跡**

---

一般国道407号線埋蔵文化財発掘調査報告書  
〈第1分冊〉

平成10年3月20日 印刷

平成10年3月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台四丁目4番地1

電話 0493 (39) 3955

印刷／有限会社 平電子印刷所